

41574

教科書文庫

4
810
41-1931
20000 89452

Kodak Gray Scale

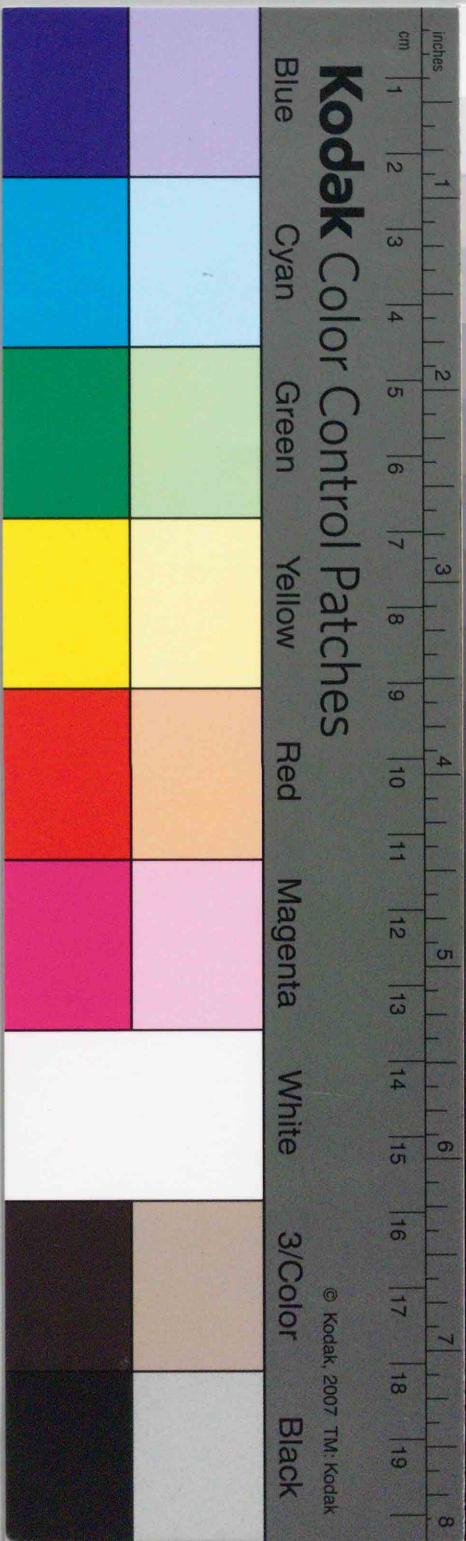
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



© Kodak, 2007 TM: Kodak



4a
810
照6

帝國讀本

新制第一版 卷六



文部省檢定濟

昭和六年十二月二十三日 中國語文

教育学科
資料室

4a
810
AB 6

帝國讀本

新制第版

文學博士 芳賀 矢一 編
文學博士 上田 萬年
文學士 長谷川 福平 訂補



東京

合資
會社
富山房發兌



名馬

松岡映丘筆

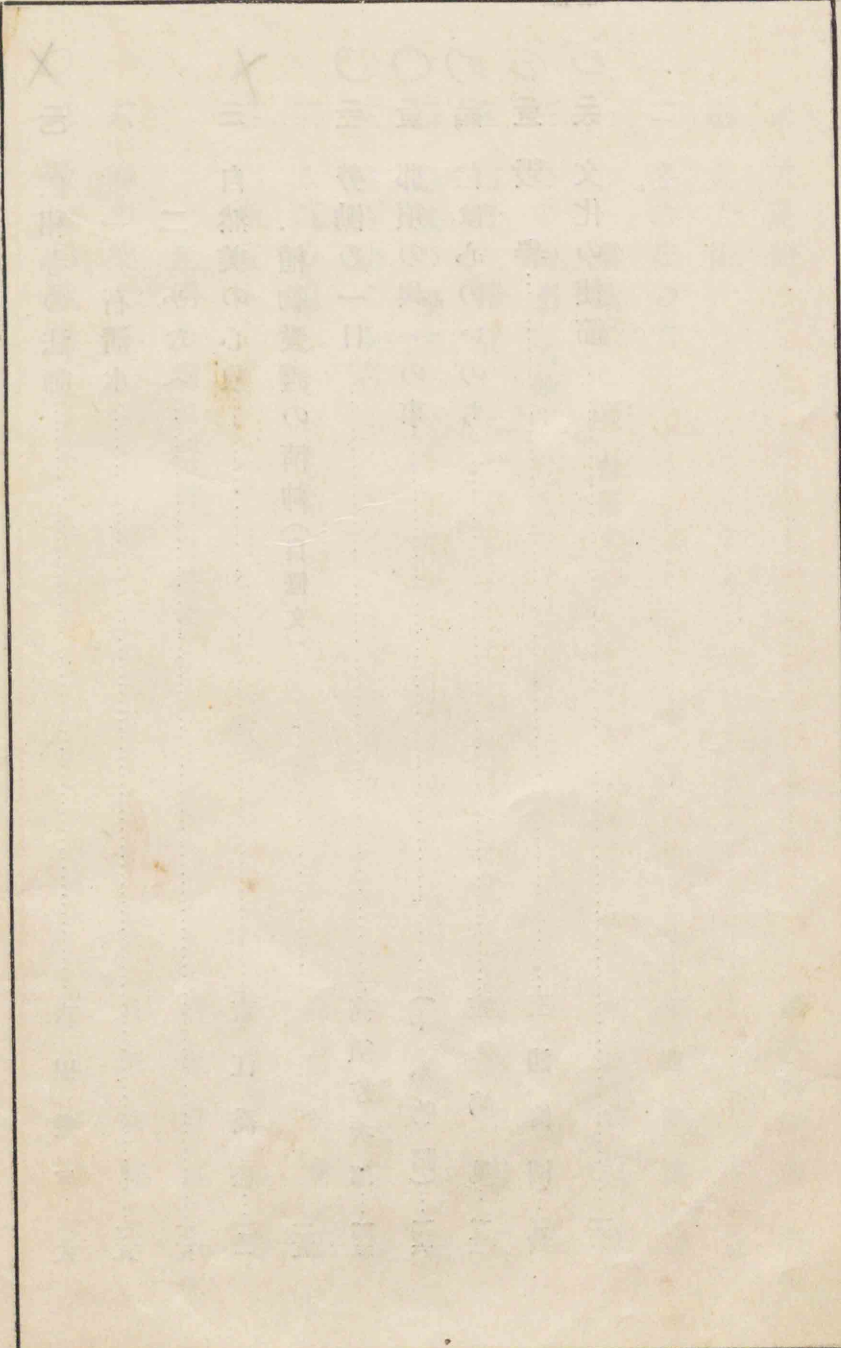
帝國讀本 卷六

目次

- 一 野邊の秋風(古歌)……………一
- 二 雲行く雁……………(異本會我物語)三
- 三 敵討と時代精神……………藤村作六
- 四 秋窓雜記……………北村透谷一四
- 明るい心と暗い心(自修文)……………川村理助一九
- 五 松の下露……………(太平記)二六
- 六 菊(詩)……………中西悟堂三
- 七 長安の空……………三
- 八 舊都の月……………(源平盛衰記)四

九 武藏野……………	國木田獨步……………	四
一〇 大大阪……………	……………	五
二 冬の夜の音……………	相馬御風……………	六
落葉する頃(自修文)……………	相馬御風……………	七
三 冬の山里(古歌)……………	……………	七
三 吉野の行宮……………	北畠親房……………	六
四 最後の参内……………	(太平記)……………	六
五 自ら助くる者……………	永田秀次郎……………	六
六 人臣の道……………	北畠親房……………	五
七 明淨直……………	五十嵐力……………	九
光明を尙ぶ精神(自修文)……………	清原貞雄……………	八
八 春の楽しみ……………	貝原益軒……………	四
〇 元 敕撰和歌集……………	窪田空穂……………	二〇

× 〇 仁和寺の法師……………	吉田兼好……………	二六
一 石清水……………	……………	二六
二 かなへ……………	……………	二九
× 三 自然美の心象……………	吉江喬松……………	三三
植物愛護の精神(自修文)……………	……………	三五
〇 三 労働の一日……………	高須芳次郎……………	四三
〇 三 那須の與一の事……………	(平家物語)……………	四四
〇 四 仁は心のいのち……………	室鳩巢……………	五三
〇 五 毀譽……………	三浦梅園……………	五五
〇 六 文化の使節……………	……………	六一



帝國讀本 卷六

一 野邊の秋風

^(一)藤原俊成

^(三)加藤宇萬伎

^(五)源順

夕されば野邊の秋かぜ身にしみて
 うづら鳴くなりふか草の里^(二)

ものゝふの草むすかばね年ふりて
 あき風さむしきちかうが原^(四)

水の面にてる月なみをかぞふれば

(一)鎌倉時代の歌人。千載集の撰者。元久元年(一一八四年)歿。年九十四。

(二)今の京都市伏見區深草。

(三)江戸時代の國學者。靜遇舎と號した。安永三年(一八〇四年)歿。年五十七。

(四)桔梗ヶ原。今長野縣松本市南方の原。本年(一一三二年)武田信玄が小笠原長時と戦つて大勝を得た。

(五)平安時代の歌人。また詩文。永観元年(一一三三年)歿。年七十三。

(一)鎌倉時代の歌人。中納言光隆の子。俊成に學び定家と名を齊しくした。嘉禎三年(八八七年)歿。年八十。
(二)鎌倉時代の人物。鎌倉時代の人物。藤原資房の男。藤原資房の四少將。参議。藤原資房の男。

はるのほてさくらたにまた散のこくもなしと誰かといふらむ
眞淵
(三)長野縣筑摩郡歌枕として古來名高い。

こよひぞ秋のもなかなりける

藤原家隆

した紅葉かつ散る山のゆふ時雨

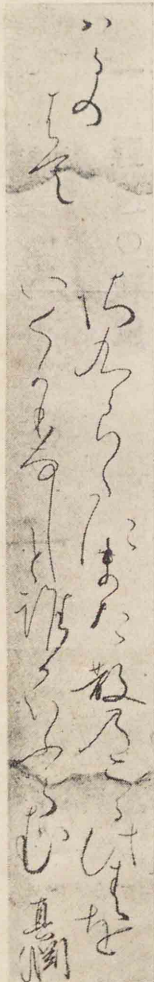
ぬれてやひとり鹿の鳴くらん

藤原資宗

いかだしよ待てこととはん水上は

いかばかり吹く山のあらしぞ

賀茂眞淵



賀茂眞淵筆蹟

信濃なるすがの荒野をとぶわしの

つばさもたわに吹くあらしかな

二 空行く雁

(一)一八四一年。
(二)兄曾我十郎祐成の幼名。
(三)弟曾我五郎時致の幼名。

いざせ給へ
(四)夫祐泰の死後祐信に再嫁した。

(五)祐信。
(六)祐經。
(七)源頼朝。

頃(一)は人皇第八十一代安德天皇の養和元年(二)あらたまの年立返りて一萬は九つ箱王(三)は七つにぞなりにける。或夕暮箱王は母の膝の上(四)に戯れながらいかに母御前(五)父はいづくにおはしますぞや誠やらん父の御事は佛になつてましますとやその佛はいづくにましますぞや(六)行きて拜み奉らばや母御前(七)いざせ給へと言ひければ遙かに忘れたる來し方も今更思ひ出されて消入るばかりなり母泣く(八)く宣ひけるはあの曾我殿こそ己等が父にてあれと心強く語られけれども涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。

箱王(九)重ねて申しけるは父御前は誠やらん狩場より歸り給ふ途にて工藤一藤(十)とやらんに射られて死に給ひぬと兄御前は語らせ給ふぞや當時鎌倉殿の切者にて鎌倉より伊豆へ下る時もあり伊

(一)相模國(神奈川縣)足柄下郡曾我中村

かりがね

人倫

(三)三郎祐泰

豆より鎌倉へ上る時もありとや我等をも殺さんとや思ふらん。我等がこの里にあるを知らずや過ぐらん。など大人しく語りければ、母より始めて女房たちまで皆袖をぞ絞りける。
かくて夏も過ぎ秋もたけ、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びあたるに、五つ連れたるかりがねの南をさして飛行くを見て、一萬申しけるは、あれ見給へ箱王殿。空を飛ぶ翼も別の翼ぞ交へざりける。五つ連れたるは、一つは父、一つは母、三つは子供にてぞあるらん。物言はぬ鳥類だにかくの如し。我等人倫に生れながら、わ殿は弟、我は兄、母は實の母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。我等が父をば河津殿と申してありきとかや。父だにも世におはしまさば、馬鞍をも賜はり、弓、矢をも持ちて、今ぞ思ふ様に物を射ありきなん。我等より幼き者にて、馬鞍、弓、矢をもて物を射ありく事の羨ましさよ。これ等の事ども思ひ續

小賢しく



會我兄弟 (飛田周山筆)

くれば、何時もよりも今宵は父御前のこひしくおはしますぞや。とて、袖に顔を差入れてさめぐと泣きければ、弟も小賢しく顔を合せて泣きあたり。一萬の乳母の女房これを聞きて、あなあさまし。人もこそ聞け。いかにわ上臈たち、夜も更けぬるに、さ様にはおはするぞ。疾くく入らせ給へ。と恐しげに言ひければ、二人の者は門外に逃出でて、思ふ様に飽くまで泣きて後に、内に入りにつ

その後、二人の者ども我が身の程を知りぬれば、世に亡き父を慕ひつゝ、語り合するまではなけれども、唯目ばかりを見合せて、互

に袖をぞぬらしける。或時兄弟は、竹の小弓に薄はぎの小矢を取添へて、遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけるに二人立向ひ、あなたこなたに射通して、一萬箱王に申しけるは、我等も何時か成長して、わ殿は十三、我は十五にだにもならば、いかならん野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如く差合ひ射取りて後には、ともかくもなりなん。わ殿も弓をよく射習ひ給へ。我も射習はん。弓矢は男の一の能にてあるなるぞ。と言ひければ、弟もうちうなづきけり。年ばへには恐しき事かなと人々思ひけり。

— 異本曾我物語 —

三 敵討と時代精神

藤村 作

敵討は、江戸時代の淨瑠璃、歌舞伎劇や小説で、御家騒動と共に、最も多く採られた題材である。單に文藝の題材であつたばかりでなく、往々社會の事實として存在し、公許の形で社會がこれを認めて

(一) 國文學者、文學博士、東京帝國大學教授、明治八年福岡縣に生れた。上方文學と江戸文學、國文學史序説等、著がある。

年ばへ



文藝
思想
感情
を
表現
する
鑑賞
の
存在
を
否認
し、
隨つて
その
事實
が
跡を
社會
に
絶つ
に至つて、
獨り
舊時代の
文藝
のみ
に
今以て
繰返し
鑑賞
される
のみ
である。
敵討
が
舊時代の
夢となつて
から、
はや
六十餘年
にも
及んで
あるので、
現代
人——
殊に
若い
人の
眼には、
變な
社會現象
として
映る
のみで、
その
美しい
精神に、
理解
も
同感
も
十分
に
出來
なくなつて
ある。

また所のものである。然るに明治維新以來、時代の思想はかゝる事
の存在を否認し、隨つてその事實が跡を社會に絶つに至つて、獨り
舊時代の文藝のみは今以て繰返し鑑賞されるのみである。敵討が
舊時代の夢となつてから、はや六十餘年にも及んであるので、現代
人——殊に若い人の眼には、變な社會現象として映るのみで、その
美しい精神に、理解も同感も十分に出來なくなつてある。

復讐本能に基づく報復的鬭争、殺傷事件は、恐らく人類あつて以
來の事實であらう。今日未開野蠻の人種間の事實に徴しても、また
古代の記録に徴しても、これを推知する事が出來る。けれども我が
國文藝上の敵討なるものは、それと同一の事實を指すものではな
い。形は同一であつても、精神は大いに異なるものである。我が國最
古の敵討物語と言はれる曾我物語にも、既に特殊な精神が表現さ
れてゐる。曾我兄弟がうち連れて空飛渡る雁を仰ぎ見て、亡き父を

思ひ、我が身を思つて語る條に、
やうく成人する程に、父が事を忘れずして、歎きけるこそ無慚
なれ。人の語れば兄も知り、兄が語れば弟も知り、こひしさのみに
明け暮れて、積るは月日ばかりなり。心のつくに隨ひて、愈忘るゝ
暇もなし。我等二十になり、父を討ちけん左衛門尉とやらんを討
取りて、母の御心をも慰め、父の孝養にも奉ぜんと、忙はしきは月
日なり。

とあるのがそれである。これに由つて、本書の出來た室町時代に於
ても、既に敵討をば單に憤怒、怨恨、嫉妬等の情を満足させる爲に敵
者の生命を奪はうとする行爲とばかりは見てゐなかつた事が分
る。本書に依ると、曾我兄弟が父の讐として工藤祐經を討つたのは、
亡父の死の原因となつた彼祐經を殺す事に依つて、亡父の靈を慰
め、また母の心を慰め、さうする事が自然に父母に對する子の道と

正善の道

なると信じた爲である。つまり、父母の心を慰める正善の道と信じ
てゐた爲の所爲である。人の子の亡き親に盡す正しき善き孝の道
と信じた行爲である。

江戸時代の敵討になると、もつと複雑になつてゐる。内外兩面か
ら考察すると、曾我物語の精神の如く單に孝と言ひ、忠と言ふが如
きものではあるまいと思はれる。江戸時代の忠義の敵討として、代
表的な大きい敵討は、赤穂義士四十七人が、主君淺野長矩の爲に吉
良義央を討つた事實である。この事實は、元祿年間の出來事である
が、彼等義士の敵討精神を徴すべき大高源吾が母に贈つた書簡の
うちに、

私事今度江戸へ下り申し候存念、かねて御物語申し上げ候通り、
一筋に殿様御憤を察し奉り、御家の御恥辱を雪ぎ申し度一筋に
て御座候。且は侍の道を立て、忠の爲命を捨て、先祖の名をも顯し

申すにて御座候。

とあり、また「段々右申す如く、武士の道を立てて、御主の讐を報じ申すまでにて云々」とも言ひ、主君の爲には父母の命をも失ひ申す事、義と申すもの止み難きためしにて候。とも言つてゐる。畢竟武士の道を立てる、忠義を致すといふに敵討の精神はあつた事になるが、これは亡君の靈を慰める自然の結果とするのではなく、曲禮から出た君父の讐は俱に天を戴かずといふ、武士社會の信條に出たものである。しかし、かゝる社會的規制のみに由るのでは、力が足りない、生命が抜けがちになる虞があるが、これに人間的な感情が力を併せる所に、ずつと有力に働いたのである。大高源吾の書簡は、第一に右に引いた通り忠義を掲げてゐるが、それに續いて次の様にも言つてゐる、

(一)禮記の一條目
(二)「父讐弗與共戴天」
信條
規制

さしての御懇意にもあそばし不被下、人並の私儀にも御座候へ

鬱憤
生害

ども、なまじひに御側近き御奉公相勤め御尊顔を拜し奉りし朝暮の儀、今以て片時忘れ奉らず。大切なる御身を捨てさせられ、忘れ難き思召し放たれて、御鬱憤遂げられ候はんと思召し詰められ候御相手を打損じ、御生害遂げられ候段、御運の盡きられ候とは申しながら、無念至極、恐ながらその時の御心底推量り奉り候へば、骨髓に徹して、一日片時も安き心無御座候。

この憤恨激怒があつて、始めて彼等の勇ましい壯んな復讐の擧は出來たに相違ない。敵討公許の精神から言へば、忠義が第一で、憤怒の感情は第二であつたはずであるが、復讐の動機として何れが有力であつたか、その輕重は一概には論定し難い事である。

當時敵を討つ事の危険と困難とは、實に尋常ではなかつた。いかなる機會にいかなる策略で返討に遇はうも計り難い。この危険は、敵討に出た者の寸時も身邊を去らぬ所である。實に夜の眼もろく

返討

機能

に合されない事は、敵討たる、身に劣る所はない。それにまた通信機關、交通機關の發達がなく、全國を通じた警察の機能の働かない時代に於て、何所に潜んで何をしてゐるとも分らない敵を、全國かけて搜索しようとする困難は、實にそれこそ筆舌に絶したものであらう。雲をつかむ様な搜索の旅を續けて行くうちに、歲月は矢の如く逝く、青春は去つて行くといふ様な場合も、實際幾らもあつたのである。かういふ人たちにも、敵討を武士の道と信じた精神に變りはなかつたであらうが、憤恨激怒は人間の常として、歲月と共に薄らいで行つたであらう。二十年、三十年とかゝつた敵討の場合には、つくづく自分がばからしくさへ感ぜられたであらう。

かうして疲れ行く心、薄れ行く感情に鞭うつて、搜索を續けさせたものは、恐らく孝の精神ばかりではない。忠の精神ばかりではない。家の滅亡、妻子の飢饉、貧窮の苦痛、名譽の汚損、かうしたものが目

庶民

前にぶらさがつてゐて、却つて孝の精神、忠の精神よりも有力であつたかも知れない。搜索に倦み疲れて、旅宿の孤燈の下にもうつくづくと敵搜索がいやになつて、斷念してしまはうと思ふ側から、それでは家は滅びるがよいか、妻子は饑ゑるがよいか、お前の名譽は地に落ちるがよいかとさゝやく聲が聞えたのに、勵まされ、した者も少くなかつたであらう。文藝上の敵討は理想化され、美化された敵討であるが、事實としては、かういふ推定が寧ろ眞意眞相に近いのではなからうか。

庶民階級にも敵討は屢あつた。その精神は武士のそれと多く異なるべき理由はないが、唯彼等はそれを看過し、また成遂げ得ない爲に、家の存在を脅され、生活の安全までも脅される様な事はなかつた。即ち敵討を彼等の道として社會の規制に無理強ひされる事が少かつたから、彼等の敵討は、比較的本能に近い所があつたと思

事相

彌漫する

(一)詩人、思想家、名は門太郎、神奈川縣の人、明治二十七年、透谷全集二卷がある。

はれる。

思ふに、近古、近世を通じて社會に敵討なる特殊事相の存在した事は、一面には人間本能に根を持つてゐたが、また精神的には武士道なる時代精神の存した爲であり、社會的には刑法の備らず、警察の力の行届かなかつた爲であり、武士階級を中心として殺伐な精神が彌漫してゐた爲である。

要するに、敵討は時代精神と社會の實情との生出した特殊な事相として見るべきであらう。

四 秋窓雜記

一

悲しきものは秋なれど、また心地よきものも秋なるべし。春は俗を狂せしむるに宜しけれど、秋の士を高うするに如かず。花の人を

(一) 北村透谷

喜、悲、憂、哀

五情を沒了す

醉はしむると月の人を清からしむるとには、おのづから味はひを異にする物あり。喜樂のうち人間の五情を沒了するは、世俗の免るゝ能はざる所ながら、我は萬木凋落の期に當り、靜かに物象を察するの快なるを選ぶなり。

二

希望は人を欺き易きものぞ。今年の盛夏鎌倉に遊びて、をる事僅かに二日。思へらく、この秋こそは此所に來りて、よろづの秋の悲しさを味ははんと。圖らざりき、身事匆忙として、空しく中秋の好時節を紅塵萬丈の裡に過さんとは、されど秋は鎌倉に限るにあらず、人間到る所に詩界の秋あり。欺き易き希望を駕御するの道はこれにこそあれ。

三

我が庵もまた秋の光景には漏れざりけり。喉鳴きやぶるばかり

のひよの聲々高き梢に聞ゆるに、窓開きて其所か此所かとうち見れば、其所にもあらず、此所にもあらず。窓を閉ぢて書を繙けば、一層高く聞ゆなり。鳥の聲ぞと聞けば鳥の聲なれど、秋の聲ぞと聞けば、その面白き讀書の類にあらず。

四

病みて他郷にある人の身の上を氣遣ふは、人も我も變らじ。されど我は常に健全なる人の偶、病みて臥床するを祝せんとはするなり。病なき人の道に入る事の難きは、富める人の道に入り難きに等しからん。世には體健かなるが爲に心健かならざる者の多ければ、常に健かなる者の十日二十日病床に臥すは、さまで恨むべきにあらず。ましてこの秋の物色に對して、命運を學ぶこよなきたよりあるをや。かく我は眞意を以て微恙ある友に書きおくれり。

微恙

五



(筆 濤 秋 畑 田) 鴉

萩薄、我が庭に生ふれど、我は在來の詩人の如くこれ等の草花を珍重する事能はず。我は荒漠たる原野に、名も知らぬ花を愛づる心はあれども、園藝の些技にて作り出でたる矮小なる自然の美を、さ程に嬉しと思ふ情なし。さは言へど、敢へて在來の詩人を責むるにはあらず、また自己の愛する所を言はんとにもあらず。唯我が秋に對する感の一として記すのみ。

六

鴉こそをかきものなれ。我が山庵の窓近く下立ちて、我をながし目に見おこしたる後、逐へども去らず、叱すれども驚かず、や

局量

やともすれば脚を立て首を揚げて、飛去らんとする氣色は見すれど、我が害心なきを知ればにや、唯足をそろへて跳り歩くのみ。浮世は廣ければ、かゝる曲者を置きたりとて、何の障にもなるまじけれど、その芥ある所に集り、穢物ある所に群がるの性あるを見ては、人間の往々これに類する者多きに想ひ到りて、聊か心悪くなりたれば、物を投ぐる眞似しけるに、忽ちに飛去りぬ。飛去る時、かあ〜と鳴く聲は、我が局量を嘲るものの如し。げに皮肉家といふ者、文界のみにあらざりけり。

七

夜更けて枕の未だ安まらぬ時、こほろぎの聲を聞くは、眞の秋の情なるらん。その聲を聞く時に希望もなく、失望もなく、恐怖もなく、欣樂もなし。世の心全く失せて、秋のみ胸に充つるなり。松蟲、鈴蟲のみ秋を語るにあらず。古書、古文のみ物の理を我に教ふるにあらず。

一こほろぎの爲に我は眠の惜しまれて、物思なき心に思を宿しけり。

八

芭蕉の葉色秋風を笑ひて籬を蓋へる微なる住家より、ゆかしき音の漏れきこゆるに、そが中を窺ひ見れば、年老いたる盲女の琵琶を弾ずる面影、凜乎として俗世のものにあらず。その律調の端正なる事、今の世の浮華なる音樂に較ぶべからず。嬉しき事に思ひぬ。

— 透谷集 —

自修文

明るい心と暗い心

川村 理助

我々の心は時々晴れたり曇つたり、明るくなつたり暗くなつたりする。心が晴れ〜して明るい時には、どこからともなく微笑が生れ、鼻唄の一つも唱つてみたい様な氣分になつて來るが、

(一)教育家、私立
調布高等女學
校長、慶應三
年(二五二七
生)茨城縣に
生れた
鼻唄
鼻にかつた
低い聲で小唄
などを唱ふこ
と。

明るい心と暗い心(自修文)

澁面 にがしくしつ
ら顔にかめづ

位階 くらゐの等級

むか 怒氣が起り立
つてやるせな
いさま

象徴 ものそれ自身
が説明を要せ
ず直接に接せ
ることを發揮
する例は文
藝を、剣は武
勇を表す類

心が陰鬱に暗い時には、ひとりでに澁面じぶめんが作られ、身の置所さへない様な、いら／＼した感じに捉はれて来る。
人生何が一番幸福であるかと言ふに、この明るい心に住する事程、幸福な事はあるまい。位階がいかにか高からうと、財産がいかにか豊かであらうと、學識がいかにか博からうと、心中何時もいらいらとし、むか／＼とし、少しも晴れ／＼とした心境が現れて來ないとしたら、そんな不幸はあるまい。これに反して、たとひ卑賤であり、貧窮であり、無學であつても、心中何等の曇もなく、蔭もなく、清く、明るく、朗かに、豊かにのんびりとしてゐる事が出來たら、これに上越す幸福はあるまい。
明るい心は健全の象徴しやうちゆうであり、暗い心は不健全の象徴である。精神身體の各部々々が少しも過不足なく、互に調子を合せて自彊不息の活動を續ける時、これを健全と呼び、これに反する時、これを不健全と稱へる。社會國家の健全不健全も、明るい暗いも、全

揆を一にす 異なることが
ないことをい
ふ。同じすぢ
あひ

低迷 ささよひまよ
ふさま

くこれと揆を一にしてゐる。
我々の心には知情意の三活動がある。この三つがうまく調子を合せて働いてゐる場合は健全な時で、常に明るい感じをしてゐるが、一朝その調和が破れ始めると、忽ちに心は暗い不健全な状態になる。
知情意の活動の調和を破るもの、それが「我」である。「我」に導かれて、「知」が活動すれば「我見」となり、「我」に導れて、「情」が活動すれば「我情」となり、「我」に導かれて、「意」が活動すれば、「我意」我意となる。この「我情」我意、我見は、何時でも調子外れの不健全な活動、即ち暗い心の根源となるものである。
稀には、「我情」を張り、「我意」を貫き、「我見」を振廻して一時の満足を買つて、いゝ氣になる事もないではないが、そんな心境は永續するものではなく、すぐその後から、不満足の暗雲が低迷さいひして來て、一層暗い心に歸る事は、何人も覺えのある事であらう。元來この

蟬脱せんだつ 蟬がその殻からぬける様に舊いことを捨去ること。全くと一新すること。
(Hint) それとなく示すこと。暗示。

ち偶然にも、捨我精進の状態が現れた爲、暗い心の惱から蟬脱し得るからである。
 我々は此所にヒントを得なければならぬ。人生の荒波を突破しようといふ我々が、少しくらゐの困苦艱難を、氣に食ふの食はないの、損だの得だの、理窟がどうのかうのと、我情、我慾、我見を動かしてゐてはだめだ。與へられた運命に對して一心不亂、傍目も觸らずに驀進しなければだめだ。さうさへすれば、船酔の様、暗い心に惱まされる氣遣は斷じてない。何時も清く明るい氣分での世を渡る事が出来る。萬一自分の運命が生命を抛たねばならぬ様な場合であつても、少しもわるびれず、平然として死地に就くであらう。一所懸命、一心不亂、傍目觸らずに驀進する。これが即ち捨我精進に外ならぬ。
 昔親鸞上人は、自分は法然上人から「御念佛を申せ。そしたら阿彌陀佛が必ず淨土に迎へて下さる。」と御訓を受けたから、その通

一向專念いこうせんねん 心のある一事に注いで、ひとむきにすい、み、他を顧ないこと。
 信受奉行しんじゆぶぎやう 佛を信じておこなひますこと。

(Gethsemane) エルサレムに近い橄欖山の麓にあつた小園の名。キリスト苦難の地。
(二) 新約聖書マタイ傳第二十六章第三十九節

り一向專念に實行してゐる。萬一それが虚偽であつて、念佛を申した爲に地獄に落ちる様な事があつても、毛頭恨はない。と、少しも我見を出さず、我慾我情をも捨去つて、ひたすら信受奉行した。これが本當の捨我精進である。またキリストは(一) ゲッセマネに於て、父よ、この苦き杯を脣より放ち給へ。されど我が意をなさんとにはあらず、御意に任せ給へ。と、生も死も擧げて神の御意に任せて祈つた。これも本當の捨我精進である。
 我等の進むべき道は、與へられた職業、與へられた地位、與へられた父母、與へられた兄弟、與へられた夫若しくは妻、與へられた子女、與へられた朋友、與へられた社會、與へられた世界、與へられた宇宙に對し、小さな我情、我慾、我見等を動かさず、一心不亂精進するにある。其所に一切の惱より脱出し、永久に光明輝く心境に住する事が出来る。其所に明るい朗かな世の中を創建し、秩序ある進歩發達を遂げる事が出来るのである。

いかにせん頼むかけとて立寄れば

なほ袖ぬらす松のしたつゆ

山城の國の住人深須入道、松井藏人二人は、この邊の案内者なりければ、山々峰々残る所なく搜しける間、皇居隠れなく尋ね出され給ふ。主上誠におそろしげなる御氣色にて、汝等心ある者ならば、天恩を戴いて私の榮華を期せよ。と仰せられければ、さしもの深須入道俄に心變じて、あはれ、この君を隠し奉りて義兵を擧げばや。と思ひけれども、あとに續ける松井が所存知り難かりける間、事の漏れ易くして道の成り難からん事をはかつて、もだしけるこそうたてけれ。俄の事にて網代の輿だになかりければ、張輿の怪しげなるに扶け乗せ参らせて、先づ南都の内山へ入れ奉る。その體唯殷湯夏臺に囚はれ、越王會稽に降ぜし昔の夢に異ならず。これを聞きこれを見る人毎に、袖をぬらすさずといふ事なかりけり。

もだしけるこそうたてけれ

(一)今奈良縣山邊郡朝和村大字

柳ノ内の稱

(二)殷の湯王が夏臺

といふ牢獄に

投ぜられた事を指す

(三)勾踐

(四)今の支那浙江省紹興縣にある山

(一)京都賀茂川の東で五條と六條との間、北條氏が探題を置いた所

龍顔
(二)光嚴院



笠置山行宮址

この時此所彼所にて生捕られ給ひける人々都合六十一人、その所從眷屬どもに至るまでは數ふるに違あらず。或は籠輿に召させられ、或は傳馬に乗せられて、白晝に京都へ入り給ひければ、その方ざまかと覺ゆる男女街に立ちならびて、人目をも憚らず泣悲しむ。あさましかりし有様なり。十月二日、六波羅の北方常葉駿河守範貞、三千餘騎にて途を警護仕つて、主上を宇治の平等院へ成し奉る。その日、關東の兩大將京へは入らずして、すぐに宇治へ参り向ひて龍顔に謁し奉り、先づ三種の神器を渡し給はりて、持明院新院へ参らすべき由を奏聞す。主上、藤房を以て仰せ出されけるは、三種の神器は古より繼體の君位を天に受けさせ給ふ時、自らこれを

授け奉る物なり。四海に威を振ふ逆臣あつて暫く天下を掌に握る者ありと雖も、未だこの三種の重器を自ら擅にして新帝に渡し奉る例を聞かず。その上、内侍所をば笠置の本堂に棄置き奉りしかば、定めて戦場の灰塵にこそ落ちさせ給ひぬらめ。神璽は山中に迷ひし時木の枝に懸け置きしかば、終にはよも我が國の守とならせ給はぬ事あらじ。寶劍は武家の輩若し天罰を顧ずして玉體に近づき奉る事あらば、自らその刃に伏させ給はん爲に、暫くも御身を放たるゝ事あるまじきなり。と仰せられければ、東使兩人も六波羅も、詞なくして退出す。

袞衣

翌日龍駕を廻らして六波羅へ成し參らせんとしけるを、さきざき臨幸の儀式ならでは還幸なるまじき由を、強ひて仰せ出されける間、力なく鳳輦を用意し、袞衣を調進しける間、三日まで平等院に御逗留あつてぞ、六波羅へは入らせ給ひける。日來の行幸に事變り

天人因縁
五衣相見

一 若殿上掛
二 若殿
三 若殿上
四 若殿下
五 若殿

天上の五衰人間の一炊

(一) 詩人 明治二十八年金澤市に生れた。東京市花巡禮、武蔵野等の著がある

て、鳳輦は數萬の武士にうち圍まれ、月卿雲客は怪しげなる籠輿、傳馬に扶け乘せられて、七條を東へ河原を上つて、六波羅へと急がせ給へば、見る人涙を流し、聞く人心を傷ましむ。悲しいかな、昨日は紫宸北極の高きに坐して、百司禮儀の装をつくるひしに、今は白屋東夷の卑しきに下らせ給ひて、萬卒守禦の厳しきに御心を惱ませらる。時移り事去り、樂しみ盡きて悲しみ來る。天上の五衰人間の「一炊」唯夢かとのみぞ覺ゆる。

— 太平記 —

六 菊

(一) 中西 悟堂

麗かな菊の園を私は歩きまはる。
高貴な花の間を、
優雅な香の中を、
王子のやうに

爽かに歩きながら、
 私は日本の花の王を讃へる。
 何といふ清淨な誇らかさ、
 何といふ美しいしとやかさであらう。
 純白な花、黄いろい花、
 伸びた花びら、卷かれた花びら、
 花は花に隠れ、花は花から秀でて、
 鮮かに優しく、
 寶石のやうに日の光に浮ぶ。
 清潔な祭のやうな、神聖な彫刻のやうな、
 尊い、畏い日本の花よ。
 あゝ、鶴のやうな心になつて、
 この日本の花の王のうたげの中を、

秋の日のうたげの中を、
 爽かに私は歩きまはる。

七 長安の空

大ふねにまかぢ繁貫きこの吾子を

からくにへやるいはへ神たち

光明皇后は御甥藤原清河が遣唐使となつて唐に赴かうとした時、その航路の平安をかく祈らせられた。清河はこれに答へ奉つて、
 すが野にいつく三諸の梅の花
 榮えてあり待てかへり來んまで

と歌つた。

優雅な歌の贈答に現れた明るい晴々しい鹿島立。遣唐使は奈良朝から平安朝へかけて、廷臣が賜はる最も赫かしい、最も榮譽ある

(一) 萬葉集卷十九

(二) 中衛大將房前の第四子。天平勝寶九年(七三七年)唐で歿した。
 (三) 萬葉集卷十九

鹿島立

(一)第四十六代
(二)一四一二年

(三)唐の第六代の
皇帝。睿宗の
第三子。寶應
元年(西紀七
六二年)政
七十七年

舉止

宣揚す

任務であつた。それは國と國との公の交際を掌るばかりでなく、文化の媒介といふ意義深い使命を持つものであつた。
孝謙天皇の天平勝寶四年、藤原清河は遣唐大使として唐に渡り、長安の都を訪れて、玄宗皇帝に謁見した。清河は貴顯の出であると共に學識も深く、その閑雅な儀容はいたく唐の朝廷を驚かした。驕傲一世に鳴つた玄宗皇帝も、

「かの國賢主あり。今その使臣を觀るに、舉止常に異なり。」
と稱し、日本の國を號して有義禮儀君子之國と言つたといふ。またこの時の副使大伴古麻呂は、正月の賀を受けるに當つて、我が使節の列位が新羅の下位にあるのを難じて、これを改めさせたと傳へられてゐる。重き君命を受けて遠く異國に使し、善く國威を宣揚した清河たち、彼等はたゞに文化の仲介者であつたばかりでなく、國賓の體面、祖國の面目をも輝かして、善くその使命を果したのであ

(一)第三十四代
(二)一三九〇年

(三)樂師惠日と共
に遣唐使とな
り、舒明天皇
の四年唐使高
表仁と共に歸
朝した。

(四)經術を以て稱
せられ、中大
兄皇子は鎌足
と共に周孔の
教をその家で
學ばれた。

(五)隋に留學する
こと三十三年
歸つて國博士
となり、詔を
奉じて八省百
官を議した。

(六)舒明天皇の四
年唐使高表仁
に隨つて歸來
した。博士とな
つた。白雉四年
(一三三三年)
寂。

(七)本姓は下道朝
臣。仲麻呂と

る。

遣唐使の派遣は舒明天皇の二年、犬上御田鍬が始めて唐に遣はれて以來、仁明天皇の御代まで十數回の多きに及んだ。當時支那は漢族の勢威が四方に張つて、東西兩文明の融合も圖られ、唐都長安は正に世界的文明の中心たるの觀があつた。遣唐使は實にその文化を慕つて送られた國際的の使節であつた。そしてその都度必ず留學生や學問僧を従へ、また中には琴を彈じ、琵琶を善くするなど、一藝一能の才ある者をも伴なつて行つた。

長安の空にあこがれて、海を渡つた文化の先人、彼等は親しく唐の文化を尋ねて歸朝した。かの大化の改新に與つた南淵請安、高向玄理、僧旻等は、實にさきに小野妹子の再度の渡航に隨つて隋に渡つた留學生であつた。奈良の朝廷に才學を以て著れた吉備眞備や、平安朝の初め佛教界に清新の新宗派を唱道して活躍した最澄や、

共に留學生と
なり、經史を修
め、歸り、右
大臣に上つた。
大龜(六年)一
寶龜(六年)一
四三(五年)一
年八十三(三) 歿

(一)第五十四代。
葛野麻呂の子
承和三年(一
四九六年)唐
風に遭つて、洋中
泊し、五年再
歸り、赴き、六
十七年歿した。年
四十五

空海も、共に等しく唐に留學した學生、僧侶であつた。
遣唐使には普通大使と副使との外に、判官、録子といふ者が數名
あつた。その外、翻譯掛の譯語や、航海に従事する水手などが加り、こ
れに留學生や學問僧を加へて、一行は二三百人の多きに上り、時と
しては六百人近くの多數に達した事もあつた。その乗船は大抵四
艘であつたから、これを「四の船」と言つた。そして第一船には大使、第
二船には副使が便乗する定めであつた。仁明天皇の御代に遣唐使
を派遣された際、第一船は最も堅牢であるといふので、大使藤原常
嗣が乗り、第二船には副使小野篁が乗る事となつた。然るに出帆後
間もなく逆風に遭つて引返し、第一船は修繕を加へた爲、第二船が
最も堅牢になつたといふので、常嗣は朝廷に奏して俄に次第を變
へ、第二船を以て第一船とした。そこで篁はこれを憤り、病と稱して
乗船せず、あまつさへ詩を作つて遣唐の事を諷したので、嵯峨上皇



陸 近 十 村 島 陵 筆

逆鱗

(一)第四十九代。
(二)太宰大貳老の
子。遣唐副使。
(三)一四三八年。

の逆鱗に觸れて、隱岐に流されたといふ。

當時造船術が幼稚で、且航海術もまだ頗る進歩しなかつたので、途中多少とも風波の難を受けて、全く事なく歸朝する事は稀であつた。中にも光仁天皇の御代に遣された小野石根(一)が、無事に使命を果して歸朝の途に就き、蘇州を發したのは寶龜九年十一月であつたが、幾何もなく風浪が俄に起り、船は眞二つに切斷されて、石根以下三十八人並びに唐使趙寶英等二十五人は、終に海に没して失せた。その他これに類した慘事は頻々として起り、遣唐使として任命される事は、名譽ではあるが、恰も戰場に向ふ様に、生別即ち死別となる有様であつた。されば中には病と詐稱し、或は父母の喪中と稱へて、その任を避けようとする者さへあつた。

壯途(二)に立つ者も、これを送る者も、共に愛別離苦の歎をかこつ事深く、

行を盛んにす

(一)大納言小黒麻呂の長子(延暦二十年)唐に赴き、暴風に遭ひ、船破れ、三年再び赴いて、德宗に謁し、翌年歸朝した。弘仁九年(八十一年)卒。
年四十六(四)

から國にゆきたらばしてかへり來ん
ますらたけをにみきたてまつる

と、別れを惜しまれながらも、使節は幾度か立つた。朝廷におかせられては、また饗餞の際に、畏くも御製の御歌を賜ひ、或は御衣、黄金などを賜はつて、その行を盛んにせられたのであつた。桓武天皇の御代に大使藤原葛野麻呂等の出發する際の饗宴には、特に漢法として支那料理を以てせられ、

このみきはおほにはあらずたひらかに
かへりきませといはひたるみき

といふ御製まで賜はつた。

國際的使節の榮譽の前に、彼等は身命を賭して渡航した。そして高貴な文明を相次いで我が國に傳へ、我が文化を高め且深めたのである。青丹よし奈良の都の文化、燦然たる王朝の學藝など、我が國

(一)中務大輔船守の子(靈龜二年)遣唐留學生となつた。時に年十六。
(二)奈良興福寺の僧。
(三)第四十四代。
(四)一三三七年。
(五)島左大臣の子。唐に使し、養老二年歸り、諸官に歷任して、中納言(至り、天平九年)一三三九年(至り、天保七年)卒。

(六)唐代の詩人。書畫にも勝れてゐた。
(七)唐代の大詩人。字は太白。杜甫と共に當時最も傑出した。

文化の根柢は、皆彼等の辛苦によつて築かれた。それは遠く近世日本の文化的躍進、明治維新以後我が國人の轉生的發展の基を固めたものであつた。思へばこれ等先人の獻身的努力は大きかつた。遣唐使は誠に晴れの使節であつたが、一度國を出でて歸來の機を失ひ、遂に骨を異域に埋めた阿倍仲麻呂や藤原清河などの事を懷ひ起すと、覺えず暗涙を催させられるのである。

仲麻呂は吉備眞備や僧玄昉と共に、元正天皇の養老元年に遣唐使多治比縣守に隨つて入唐し、唐の玄宗皇帝に重用され、姓名を朝衡と改め、王維、李白等の詩人と交り、名を文墨の間に馳せたが、孝謙天皇の御代に遣唐大使藤原清河等の唐に到つて歸國するに臨み、仲麻呂も既に在唐三十六年の久しきに及んだので、共に歸らん事を請うた。玄宗はこれを許し、仲麻呂を以て送使とした。かくて仲麻呂は明州に到り、乗船しようとする、偶、明月の皎々たるを觀て、望

郷の念に堪へず、
あまの原ふりさけ見れば春日なる
三笠の山に出でし月かも

と詠んだ。年々歳々同じく照す月に對する人は何時しか變り、嘗て



(筆泉天生萩)呂麻仲倍阿

三笠山上に皎々たる月を
仰ぎ、三十餘年の後、異域に
あつて同じ月に對した仲
麻呂が、今や幾何もなく再
び故山に月影を踏まうと
するに當つて、その感慨は

誠に無量なるものがあつたであらう。その風懷はこの絶唱を後世
に遺して、餘情を傳へてゐる。然るに何事ぞ、海上颯風に遭つて、第二、
第三、第四船は辛うじて我が國に歸つたが、清河、仲麻呂等の第一船

辛酸を嘗む

は安南に漂著し、その後非常な辛酸を嘗めて唐に歸り、清河は名を
河清と改め、相共に唐朝に仕へて果てた。遣唐使の長き歴史の上に、
特に哀愁深い物語であつた。

遣唐使は宇多天皇の御代、菅原道眞が大使に任命され、偶、唐の國
内擾亂の報を得て、自ら渡海の困難な事情を奏上して停止されん
事を請ひ奉り、遂に廢止の事となつた。

平和の使節交換正に二百年、大陸の高貴な文明は我が國土に移
植されて、我が文化の向上を促した事は測り知れない。歴史に輝く
遣唐使の名、それには先人の異常な努力が潜んでゐる。そゞろに往
時を回想する時、これ等先人の祖國に致した業績に、感謝の念の高
まるを覺えるではないか。

(一) 歌人。建久二年(八五一年)歿。年五十一。
 (二) 京都のこと。當時都は遷されて福原にあつた。
 (三) 平清盛。
 (四) 兵庫縣(攝津國)にあつた。名所。武庫江の邊の濱を言つたらしい。
 (五) 今の御影附近。
 (六) 武庫郡布引山にある。當時紀州郡智瀑を第一とし、この瀑を第二とした。
 (七) 一はる、夜の星か河邊の螢か。あまの住む方(今集)「新古今集」
 (八) 兵庫縣(攝津國)川邊郡猪名川の河口

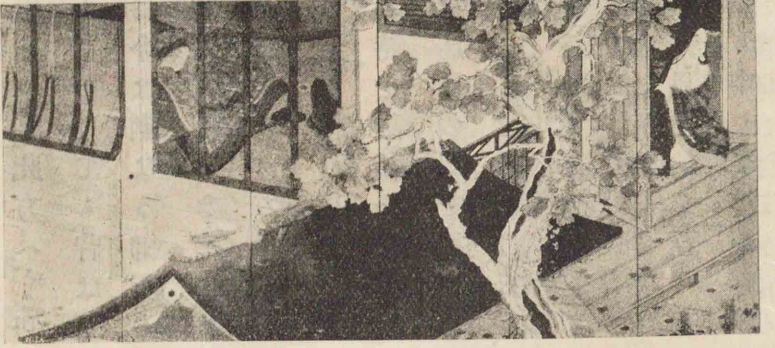


(筆陽南乾) 月の都舊

八 舊都の月

後徳大寺の左大將實定は、舊都の月をこひわびて、入道に暇を乞ひ、都へ上り給ひけり。元より心すき給へる人にて、憂世の旅の思出に、名所々々を訪ひ見て、ぞ上られける。千代に變らぬ翠は雀の松原、みかげの松、雲居に曝す布引は、我が朝第二の瀑とかや、業平の中將の、かの瀑見ての歸るさに、星か河邊の螢かと、浦路遙かに眺めけん、何所なるらんおぼつかなるな。湊の曙に、霧たちこむる昆陽の松、必ず春にはあらねども、山本霞む水無瀬川、男

(九) 同郡稻野の舊名。
 (一〇) 見わたせば山も霞む水無瀬川ゆふべは秋となに思ひけん(増鏡、後鳥羽天皇)
 (一) 大阪府(攝津國)三島郡島本村。山崎驛の南を流れる小川。
 (二) 京都府(山城國)綴喜郡。山崎驛と淀川を挟んで相對する。山中に石清水といふ泉。山上に石清水八幡宮がある。
 蓬がそま(杣)鳥の臥所
 (一) 皇太后藤原多子(近衛天皇の皇后)の御所



(筆陽南乾) 月の都舊

山に澄む月は、石清水にや宿るらん。秋の山の紅葉の色、稻葉を渡る風の音、御身に浸みてぞ思しける。
 さても都に入り給ひ、彼方此方を見給へば、空しき跡のみ多くして、偶、残る門の内行交ふ人もなければ、淺茅が原、蓬がそまと荒果てて、鳥の臥所となりにけり。八月半ばの事なれば、まだ宵ながら出づる月、主なき宿に獨り住み、をり知り顔に鳴く雁の音さへつらくぞ聞し召す。大將はいと哀に堪へずして、大宮の御所に参りかねて心知れるな、がしの侍従して、かくと申させ給ひければ、宮斜ならず御

居待の月

あたりを拂ふ

悦ありて、此方へ。と仰せけり。大將南庭をまはりて、彼方此方を見給ふにつけても、昔は百敷の大宮人にかしづかれて、明し暮し給ひしに、今は幽なる御所の御有様、軒につた茂り、庭に千草生ひかはす。言問ふ人もなき宿に、萩吹く風も騒がしく、昔をこふる涙とや、露ぞ袂をぬらしける。時しあればと思しくて、蟲の怨もたえん。に、草のとざしも枯れにけり。大將哀に心の澄みければ、庭上に立ちながら古き詩を詠じ、それより御前に参り給ひけり。八月十八日の事なり。宮は居待の月を待ちわびて、御簾半ば巻上げて、御琵琶をあそぼしてわたらせ給ひけるが、山立出づる月影を、尙や遅しと思しけん、御琵琶をさしおかせ給ひつゝ、御心を澄ませ給ひけり。大將参り給ひければ、大宮はばちにて、それへ。と仰せけり。その御有様、あたりを拂ひて見え給ふ。互に昔今の御物語あり。大將は福原の都の住憂き事語り申して泣かれければ、宮は平の京の荒行く事を仰せ出して、共

に御涙に咽ばせ給ひけり。
かくて夜もいたく更けければ、後の宮は御琵琶をかき寄せさせ給ひて、秋風樂を弾かせ給ふ。侍従は琴を弾きけり。大將は腰より笛を取出し、遙かにこれを吹き給ふ。その後故郷の荒行く悲しさを、今様に作りて歌ひ給ふ。

古きみやこを來て見れば、

淺茅が原とぞ成りにける。

月のひかりはくまなくて、

あき風のみぞ身にはしむ。

と三遍歌ひ給ひければ、宮を始め参らせて、御所中に候ひ給ひける女房たちをりから哀に覺えて、皆袂をぞ絞りける。

—源平盛衰記—

(一)小説家。名は哲夫。千葉縣の一人。明治四十年。武蔵野、運命論者、野、欺むがさるの記等の著がある。

(Ivan) Sergeievich Turgenieff
ロシアの小説家。西紀一八八三年。本名助。長谷川辰之助。明治四十六年歿。

九 武藏野

(一) 國木田獨歩

昔の武藏野は、萱原の果もない光景で、絶類の美を鳴してゐた様に言傳へてあるが、今の武藏野は林である。林は實に今の武藏野の特色と言つてもよい。その木は主にならの類で、冬は悉く落葉し、春は滴るばかりの新緑が萌出する。その變化が秩父嶺以東十數里の野一齊に行はれて、春夏秋冬を通じ、霞に雨に、月に風に、霧に時雨に雪に、緑蔭に紅葉に、様々の光景を呈する。その妙は、ちよつと西國や東北地方の者には分りかねる。元來日本人は、これまでならの類の落葉林の美を餘り知らなかつた。林と言へば、主に松林のみが日本の文學、美術の上に認められてゐて、歌にも、なら林の奥で時雨を聞くといふ様な事は頗る稀である。自分はツルゲルネフの書いた物で、二葉亭が譯した或短篇の冒頭にある左の一節を愛讀する。

賢しげ

秋九月中旬といふ頃、一日自分がさるかばの林の中に坐してゐた事があつた。朝から小雨が降り、その晴間にはをり、なま暖い日影も射して、誠に氣まぐれな空合。おは、しい白雲が空一面にたなびくかと思ふと、ふとまたあちこち瞬く間雲切がして、無理に押分けた様な雲間から、澄んで賢しげに見える人の眼の如く、朗かに晴れた蒼空がのぞかれた。自分は坐して、四顧して、そして耳を傾けてゐた。木の葉が頭上で幽に戦いたが、その音を聞いたばかりでも季節は知られた。それは春先する面白さうな笑ふ様なさめきでもなく、夏の緩やかな戦ぎでもなく、長たらしい話聲でもなく、また秋の末のおど、した薄寒さうなお饒舌でもなかつたが、唯漸く聴取れるか聴取れぬ程のしめやかな私語の聲であつた。そよ吹く風は忍ぶ様に梢を傳はつた。照ると曇るとで、雨にじめつく林の中の様子が、間斷なく移り變つ

(一)わらびの類

物のあいろ

た。或は其所にありとある物すべてが一時に微笑した様に、隈なく赤み渡つて、さのみ繁くもないかばの細々とした幹は、思ひがけずも白絹めく優しい光澤を帯び、地上に散布いた細かな落葉は俄に目に映じて、眩きまでに金色を放ち、頭を搔きむしつた様なバアポロトニクの見事な莖、しかも熟れ過ぎた葡萄めく色を帯びたのが、際限もなくもつれつからみつして、目前に透かして見られた。

或はまた、四邊一面俄に薄暗くなりだして、瞬く間に物のあいろも見えなくなり、かばの木立も、降積つたまゝでまだ日の目に逢はぬ雪の様に、白く朧に霞む。——と、小雨が忍びやかに怪しげに私語する様に、ぱら〜と降つて通つた。かばの木の葉は著しく光澤がさめても、流石に尙青かつたが、唯そちこちに立つ稚木のみは、今はすべて赤くも黄色くも色づいて、をり〜、日の光が、



暮 林 (川合玉堂筆)

今雨にぬれたばかりの細枝の繁みを漏れて、滑りながらに脱けて來るのを浴びては、きら〜と煌いた。自分が落葉林の趣を解するに至つたのには、この微妙な紋景の筆の力が多い。これはロシヤの景で、しかも林はかばの木で、武藏野の林はならの木だから、植物帯から言ふと甚だ異なつてゐるが、落葉林の野である事は同じである。自分は屢、思つた、若し武藏野の林がならの類でなく、松か何かであつたら、極めて平凡な變化に乏しい色彩の一樣な物となつて、さまで珍重するに足らぬだらうと。

諦視す

ならの類だから黄葉する。黄葉するから落葉する。時雨がさゝやく。木枯が叫ぶ。一陣の風小高い丘を襲へば、幾千萬の木の葉高く大空に舞つて、小鳥の群の様に遠く飛去る。木の葉が落盡せば、數十里の方域に互る林が一時に裸體になつて、蒼ずんだ冬の空が高くその上に垂れ、武藏野一面が一種の沈靜に入る。空氣が一段と澄渡る。遠い物音が鮮かに聞える。自分は日記に「林の奥に坐して四顧し傾聽し、諦視し、默想す。」と書いた。ツルゲーネフも「坐して四顧して、そして耳を傾けた。」と書いてゐるが、この耳を傾けて聴くといふ事が、どんなに秋の末から冬へかけての今の武藏野の心になつてゐるだらう。秋ならば林のうちから起る音、冬ならば林の彼方に遠く響く音、鳥の羽音、囀る聲、風の戦ぐ、鳴る、嘯く、叫ぶ聲、叢の蔭、林の奥にすだく蟲の音、空車、荷車の林をめぐり、坂を下り、野路を横ざる響、蹄で落葉を蹴散す音。これは騎兵演習の斥候か、さもなれば夫婦連で遠

大様な趣

- (一) 東京府豊多摩郡中野町、東京市の西北郊
- (二) 同郡澁谷町、東京市の西郊
- (三) 東京府荏原郡世田ヶ谷町、澁谷町に接してゐる
- (四) 東京府北多摩郡、櫻の名所

乗に出掛けた外國人である。何事をか聲高に話しながら行く村の者のだみ聲。それも何時しか遠ざかつて行く。獨り寂しさうに路を急ぐ女の足音、遠く響く砲聲。隣のエ林でだしぬけに起る銃音。時雨の音に至つては、これ程幽寂な物はない。昔から和歌の題にまでなつてゐる。廣い野末から野末へと、林を越え、森を越え、田を横ぎり、また林を越えて、忍びやかに通り過ぎる時雨の音の、いかにも靜かで、また大様な趣があつて、優しく懐かしいのは、實に武藏野の時雨の特色であらう。自分は曾て、北海道の深林で時雨に遭つた事がある。これはまた人跡絶無の大森林であるから、その趣は更に深かつたが、そのかはり武藏野の時雨の、人懐かしく、やく様な趣はなかつた。

○秋の中頃から冬の初試に中野あたり、或は澁谷、世田ヶ谷または小金井の奥の林を訪うて、暫く坐つて散歩の足を息めて見よ。これ

闌干

(一)幕末頃の國學者。周防國岩國の人。文久十二年(一八六二)歿。年八十一。

等の物音の忽ち起り忽ち止み、次第に近づき次第に遠ざかり、頭上の木の葉が風なしに落ちて微な音を立て、やがてそれも止んだ時、自然の靜肅を感じ、永遠の呼吸の身に迫るのを覚えるであらう。武藏野の冬の夜更けて星斗闌干とさえた時、星をも吹落しさうな木枯が凄じく林を渡る音を、自分は屢日記に書いた。風の音は人の思を遠くにさそふ。自分はこのもの凄い風の音の、忽ち近く忽ち遠いのを聞いては、遠い昔からの武藏野の生活を思ひ續けた事もある。

熊谷直好の歌に、

夜もすがら木の葉片よる音きけば

しのびに風のかよふなりけり

といふのがある。自分は山家の生活を知つてゐながら、この歌の心をげにもと感じたのは、實に武藏野の冬の村居の時であつた。

林に坐つてゐて、日の光の最も美しさを感じるのは、春の末から

夏の初で、その次は黄葉の季節である。半ば黄色く、半ば緑な林の中を歩いてゐると、澄渡つた大空が梢々の隙間からのぞかれて、日の光は風に動く葉末々々に碎け、その美しさは言盡されぬ。日光とか確氷とかいふ天下の名所はともかく、武藏野の様な廣い平原の林が隈もなく染つて、日の西に傾くと共に一面の火花を放つのも、特異の美觀ではあるまいか。

— 武藏野 —

一〇 大大阪

紺碧の水をたゞへる濠に圍まれて、扇形に積上げられた稀に見る高い石垣は、蘚苔の色も冷く、所々崩れ落ちさへしてゐるが、今は名城大阪城をしのぶ唯一の物となつた。

千古の英傑豊太閤は、天正の昔此所に城を築いて、天下の統一を策した。當時の偉觀は今更に言ふまでもなく、白壁の樓閣二十四棟、

(一)天正十一年(一六〇四)年。

封冊

頂上に黄金の鷗尾、金箔輝く棟瓦や、檐瓦の燦として旭光に映える五層の天守閣など、天下に比類ない雄大莊嚴な物であつた。秀吉がかの大明の國王から來た封冊の文辭に憤つて冠を抛ち、その非禮を罵つてよく國家の體面を保ち、祖國の榮譽を宣揚したのは、實にこの城であつた。しかしながら、大阪兩度の陣に豊臣氏の命數が窮つて以來、この名城の面影は俄にありし日の姿を失つた。そして政治の中心は江戸に移つて、またこの地に復らなかつた。けれども大阪の歴史的懷古は、今枚擧するに違がない。

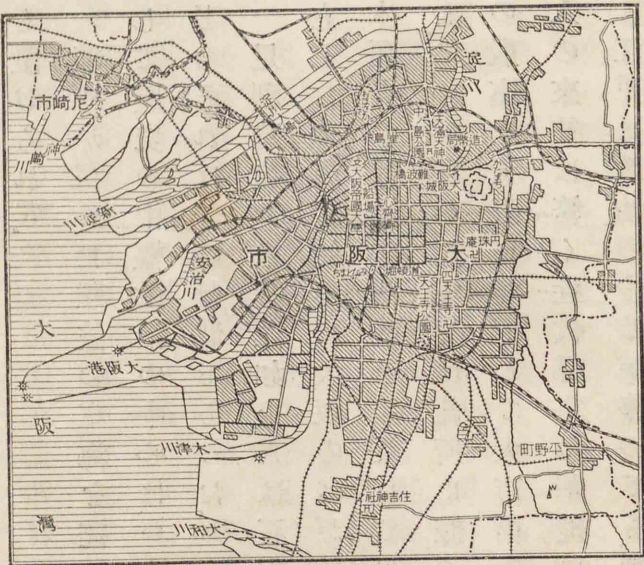
建國の遠い昔、神武天皇が御東征の御船を寄せられたといふ、風そよぐ葦の枯葉の茅渟の海難波の崎は、大阪城附近一圓の丘陵でもあつたらうか。とにかく帝國創業の第一歩は、この大阪の地に印せられたのである。仁德天皇は大和を出でて難波の京に都を遷させられた。そして天皇が八十有七年おはした高津の宮は、大阪城

(一)今の大阪灣。

(二)第十六代。

輪奐の美
(一)今大阪市天王寺區。天台宗の巨刹。我が國佛法最初の寺。

(二)孝德天皇の皇居のあつた所。今の大阪城の邊らしい。



の邊だと聞く。さればこの城をめぐる一帯の地域は、誠に大大阪發祥の地と稱してもよいのである。

聖德太子は輪奐の美を極めた。四天王寺を難波の埠頭に建てられた。それは太子の對外示威といふ深遠な御抱懷を窺ふべきものであつた。かの大化改新の直後、唐風の都城は長柄豊崎の地に營まれた。かくして國史上の劃期的な政治改革大化新政の令は、悉くこの難波の地から發せられた。やがて奈良、平安の盛事であつた遣唐使節は、皆こ

(一)難波 大郡の
館ともいふ。

(二)眞宗本願寺第
八世の高僧。明
應八年(一一
五九年)寂。年
八十五。明治
十五年慧燈大
師の諡號を贈
られた。

(三)今大阪府(和
泉國)堺市。

の難波の津から出帆した。そして此所には外國使節接待の鴻臚館(一)も設けられた。

華やかだつた難波の京海を控へ川を擁した四通八達の要地として、歴史の中樞政治の中心は、いくたびかこの地に置かれたけれどもそれは昔の難波であつた。

足利時代の末葉、蓮如上人は石山本願寺を今の大阪城の地に建立した。この時始めて大阪の名が見えた。そして天嶮を擁して石山本願寺の教權は、武威をも兼ねて四方に張つた。秀吉は是に著眼した。この一代の風雲兒は此所に據つて天下に號令すると共に、堺港の殷富を大阪に移植して、大市街の建設を企てた。かくして諸國商人の來往は繁く、近代都市の基礎は根強く築かれたのである。

江戸に政治の中心が移つても、經濟の權は大阪に残つた。諸大名の藏屋敷は續々この地に設けられて、各藩物資需給の本場となつ

た。政治の都は變じて、純然たる商業の都となつた。船場北濱堂島堺筋、江戸時代から今に引續いて全國金融の中心たる事に變りはない。それから四百年、時代に順應して飽くまでも經濟的都市の發達を進め、今や我が國第一の商工都市として、尙その膨脹發展は涯がない。

大阪城頭に立つて、約二百五十萬の人口を包容する大大阪市を見る時、誰がその昔、高津の宮の聖帝の溫い御心をお傷め申した難波の郷の衰微を想像する事が出來よう。其所は今日、立上る煤煙に空も焦げるばかりの大工業都市となつた。



尻川治安

(一) 天王寺の西南

(二) 北區中之島

(三) 北區堂島

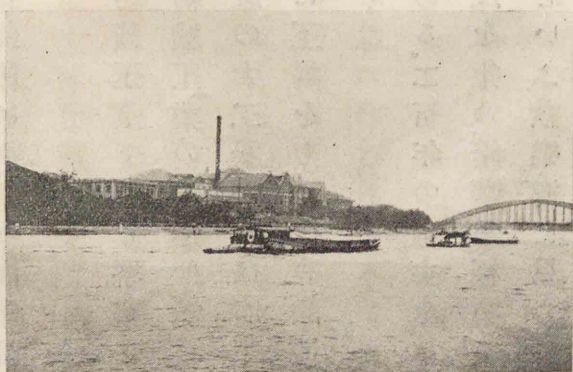
(四) 北區常安町

(五) 昭和六年五月開設

さにこそ、人の心は動かされる。心齋橋筋と道頓堀。大大阪の今日を見る眼にも、この二つの印象にはとりわけ深いものがある。

大阪はかく經濟都市として發展して來ただけに、土地に餘裕がない。随つていくつかの公園のうちで、天王寺公園が唯一つ光る。そして此所は四萬七千七百坪の廣大な園域に新鮮な近代式施設の美を誇り、市民の體育、教育の諸設備が完備してゐる。

文化の明星として輝くものには大阪朝日、大阪毎日の二大新聞社がある。また大阪醫科大學は本邦に於ける公立單科大學の嚆矢として知られるが、この大學を本として大阪帝國大學

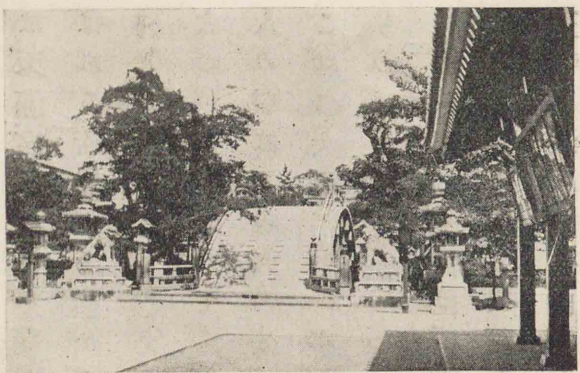


造幣局

(一) 北區新川崎町
明治二年の創設

(二) 住吉區住吉町
官幣大社の三祭神は住吉の三神(底筒男神、中筒男神、神功皇后)及び航海の守護神として名高い

の設立を見るに及んで、教育大阪の前途は愈、多幸となつた。



造幣局は淀川の清流に沿つて立つ。正門を潛ると、櫻の老樹が路を覆ふ。四月の頃この櫻が満開となれば、此所は造幣局の通拔の櫻と呼ばれて、その延長凡そ三百メートルの花のトンネルが、大阪市民の春の日の清遊に委ねられる。

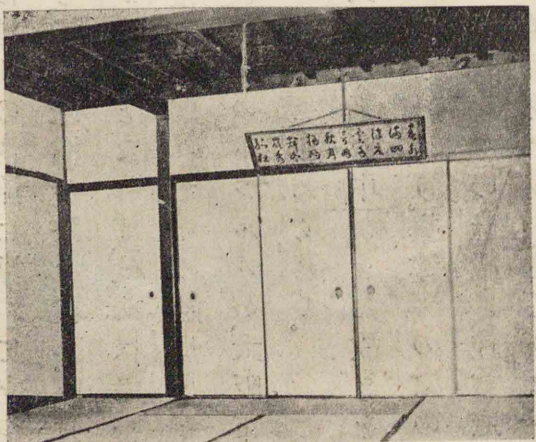
新しい大阪の都の中に、また故きを温ねるのも一興であらう。攝津一の宮の名も懐かしい住吉神社の社殿は、住吉造と呼ばれて古雅森嚴である。墨江の津の昔を知るに由ないばかりこの邊の地形は變り、當時津頭にあつて、海を渡る者の目標となつた高燈籠は、今、岸から遠く離れてしまつて

(一)北區。第六十
二代村上天皇
の御願により
天曆三年(一
六〇九年)の
創建。
(二)北區。堂島川
に臨む。

(三)東區。餌差町。
(四)真言宗の學僧
圓珠庵の開祖。
俗姓下河攝
津尼ヶ崎の人。
元祿十四年
(一七三一年)
寂。年六十二。

あるが、それでも尙住吉の反橋と共に、名所の名を恣にしてゐる。天神祭は水の都の壯觀である。毎年七月二十五日、神輿渡御の式は、天満宮の本宮を發して嚴かに行はれる。若松町の濱から水路を下る神輿、提灯の火と燃えさかるかぶり火の色と相闘つて水に浮ぶ。幾萬の人の眼はこの火の流に動いて行く。これは大阪年中行事の首位にあるものである。

(三)圓珠庵に契沖阿闍梨の舊蹟を探れば、其所はまた閑寂の趣深く、四天王寺に到れば、今はなき七堂伽藍の配置が尙依然として舊時の形を留めてゐる。思へばその源遠く、此



圓珠庵

(一)江戸時代の文豪。本名は杉森信盛。集林亭と號した。享保九年(一七三四年)歿。年七十二。



天王寺

所に精神的方面の大阪文化は發生したのであつた。そして圓珠庵は近世國學の先驅契沖の昔を語り顔である。ひとり古典復興の氣運が大阪を中心として動いたのみではない。徳川氏の初世から元祿、享保にかけては、一世の間、大阪の土と人とは、我が民衆的近代文藝の搖籃であつた。最大の國民的劇詩人近松門左衛門も、近代寫實小説の祖と言はれる井原西鶴も、一面大阪を舞臺とし、大阪の町人生活を表現した郷土作家であつた。俳諧もまた蕉風が江戸に起る前、先づ大阪に榮えた。芭蕉以後も蕪村は大阪から出て、畫壇に當代の大家であつたばかりでな

(一)江戸時代の儒者。名は誠之。大坂の人。寶曆八年(一七六〇)卒。年六十六。
 (二)贅庵の子。名は積善。文化元年(一八〇四)卒。年七十五。
 (三)贅庵の子。竹山の弟。名は積徳。文化十三年(一八〇七)卒。年八十五。
 (四)大坂市の南東隅の平野町附近にある無線電信局として名高い。

く、影響は近く明治に及んだ新俳風の先驅者であつた。その他、淨瑠璃歌舞伎、人形劇等藝術の各分野に亙り、すべての民衆的なものは、大阪に發興し、またはこれから分化した。藝術のみではない、學問までが大阪では町人的に發達した。船場今橋の市井の中で、中井贅庵は懷徳書院を起し、竹山履軒等父子相傳へて、孔孟義理の教を説いた。

しかしながら、所詮大阪は町人の都である。商工の府、經濟の都會である。大阪市を大觀すれば、近代都市の面目を遺憾なく發揮して、すべてが脈々たる躍動のうちにある。大阪無線電信局は高さ七十六メートルの大鐵柱に張られた八百九十メートルの大空中線を以て遠く電波を受け、僅々數時間の後にヨーロッパのニュースを報道する。それは科學文化の尖端に立つ大阪の新しい偉觀ではないか。大大阪、瞬時も止る所ない活動の世界、時も此所にはとりわけ早

(一)堂島川に架する橋。大阪第一の橋。
 (二)Iion.

(三)詩人、評論家。名は昌治。明治十六年(一八八三)新潟縣に生れた。新田一茶と良寛と芭蕉と貞心と良寛坊と蓮月と郷土に語る等の著がある。

く流れるが如く、人もまた不斷に躍る。かの難波橋の兩端に立つて空に嘯くライオンの彫像こそ、誠にこの大大阪の將來を象徴する物ではなからうか。

一一 冬の夜の音

相馬御風^(三)

私は嘗てこんな歌を詠んだ事があつた。

海荒れの朝はとくより與治兵衛が

わら打つつちの音のきこゆる

繩やなふ草鞋やつくる與治兵衛が

この朝はやくわらをたたくは

與治兵衛といふのは、つい四五年前まで、私の家の裏の小さな家に住んでゐた老漁夫の名である。海が荒れて漁に出られない日には、よく彼の稟を打つ槌の音が、私の家にまで聞えた。とん、とん、とん、

とん、……その音は、何時も同じ様な緩やかな調子で續いた。とんと、
とんとの間が、何時も殆ど同じであつた。けれどもその單調な槌の
音は、何時まで聞いてゐても、私を飽かせる事がない様に思はれた。
打つ槌も、打たれる稟を載せた臺も、共に堅い木で造られてゐる。し
かも直接木と木とを打ちつけるのではなく、その中間には柔らか
な一束の稟がある。音はその爲に不思議な和らかさをもつて響く。
その調子には、何とも名狀し難い安らかな單調さがある。それは強
ひてさうさせられてゐる機械的な單調さと言ふよりも、寧ろ打つ
人の氣持から自然に流れ出る安らかさを持つた調子と言つた方
がいゝ様な單調さである。

しん、と雪の降る靜かな冬の夜に、圍爐裏にあたりながら書
物を読んでゐる時などにそれを聞くと、私の心は何時となしに書
物などをそつちのけにして、その方へ惹かれて行くのであつた。

荒れつゝの吹雪の底ゆきこゆなり、
いづこか近くわらたゝく音、
その緩やかな、安らかさうな、そして何となく温みをもつてゐる
様な槌の音を聞いてゐると、何時となしに、こちらの心にも不思議
な安らかさと靜けさを與へられた。その音の續く調子は、單調で
はあるが、退屈を伴はない。和らかではあるが、底力が籠つてゐる
のであつた。

しかし、さうした與治兵衛爺さんの槌の音も、再びこの世で聞く
事が出来なくなつた。彼はもうこの世の人ではないのである。
所がこの二三年、秋の末から冬の初にかけて、與治兵衛爺さんの
稟打の槌の音を失つた私の耳に、夜な、それは違つた興味を
さそふ他の音が聞える様になつた。それは、與治兵衛爺さんの住ん

でゐた家と僅か十坪程の空地を隔てて向ひ合つてゐる仁助の家から響いて來るもみ磨臼の音である。これは打つ音ではなくて、磨



もみ磨 (川合玉堂筆)

る音である。そしてそれは、間斷なしに續く單調な鈍い響である。しかし、仁助の家から響いて來るその臼挽の音には、多くの場合たまらないよい唄聲が伴なつてゐる。

臼の挽かれる音の鈍い單調な、それであつてどこか忙しない様な調子が、その唄のメロディーに依つて、これも不思議に快く和らげられ、潤されて、聞いてゐるこちらの心も、何時となしに一種

の安らかさを與へられるのである。

夜を寒みいねがてにしてわが聞くは

うらの仁助がうすすりの唄

年貢米納めしあとの食ひしろの

もみをすりつゝ、仁助はうたふか

「それにしても、若しかうした場合、あの唄がなかつたらどうだらう。時に私はそんな事まで思つたりした。全く、若しあの唄がなかつたとしたら、あの様な鈍い單調な響を毎晩絶間なしに聞かせられる事は、可なりにもものうい事であらうと同時に、それよりも、この寒い夜頃を、あの様な單調な労働を續けてゐるあの人たちの辛さやものうさは、それこそ非常なものであらう。そして、そんな風に思つてみると、何氣なく歌はれてゐるあの臼挽唄にも、他の何物を以てしても代へ難い功德の存する事が、今更の様に考へられもするの

であつた。何時の世、誰が歌ひ出したものか分らぬが、かうした各種の労働に伴なつたそれ／＼の唄のある事は、誠に感謝すべき事である。田植には田植唄がある。草刈には草刈唄がある。馬子には馬子唄があり、船頭には船唄がある。それ等は決して御座敷唄ではない。労働に伴なつて歌はれる事に依つて、始めて眞にそれが生きて来るのである。あの様にして人々がもみ磨臼を廻轉しながら、その廻轉の調子に合わせて歌ふ時、何といふ活々とした感興が湧起る事ぞ。彼等はいかにも樂しげに歌ふ。唄の調子に連れて臼の廻轉する音もおのづと輕快になる。それに惹かされて聞いてゐる私たちまで、時には何といふ事なしに輕快な氣持にさそはれる。そして出掛けて行つて、その仲間入をさせてもらひたい様な浮々した心になる事さへある。何れにしても、かうした労働に伴なつた唄のある事は、感謝す

べき事である。それは自ら働き、自ら歌ふ人にとつては勿論、離れてそれを聞く人にとつても、誠に有難い一種の惠である。船頭に船唄がなく、馬子に馬子唄がなく、田植に田植唄がなく、臼挽に臼挽唄がなかつたとしたら、それ等の營はどんなにか現在よりもものうい事であつたらう。

よい唄は確かに一種のよい力であらねばならない。

自修文

落葉する頃

相馬 御風

一時雨來る毎に庭の木葉が散つて行く。私は今日この頃、この庭の木葉の散つて行く風情を、心ゆくばかり眺め樂しんでゐる。春の芽吹き、初夏の若葉、眞夏の緑、秋のもみぢ、何れにもそれぞれの風情はあるが、晩秋、初冬の落葉の風情もまた格別である。常磐木にもそれとしての獨得の風情はあるが、私はそれよりも

風情
おちひ。お
もむき。

を聞くのも、あともう三日だ。どの家でも眞剣に冬籠のしたくを急いでゐる。

北國の冬は永い。殆ど四箇月の間雪に埋れて暮さなくてはならぬ。

またその永い冬がやつて來つゝある。

放心
心をとめない
こと。ぼんやりしてゐること。

嵐の前の静けさ。天も地も、草も木も、あらゆる物が息を潜めて、不安のどん底に放心してゐる様なその静けさ。さうした自然の静けさに度々接するのこの頃であるが、それと共に、嵐の後の静けさ、その何とも言へない快い天地の静けさを時々味はふ事の出来るのもこの頃である。

北國の冬の荒れはもの凄い。しかし、そのもの凄い暴風雪があればこそ、そのあとの快い静けさを味はふ事も出来るのだ。

永いわびしい冬があればこそ、春の歡もより鮮かに感ずる事が出来るのだ。

○

木の葉が頻りに散る。

しかし、葉の散つた後を見ると、何れの木も、來年の春になつて芽吹くべきその芽が、堅い皮の下に用意されてゐる。

葉の落ちた後の木々の枝に、點々として小さないぼの様な見えてゐる翌年の芽の用意を見ると、私は妙に懐かしさを覚える。

夕焼空に描き出された冬枯の木のシルウエットを見上げる感じも私は好きだ。

○

自然の美その物に就いて語る事は別としても、靜かに自然の風物に眺め入る事の出来る様な心持である時の私自らを、私はいとほしく思ふ。

今日この頃庭の木の葉の散行く風情を眺め楽しんでゐる自分を顧て、私は何とも言へない有難さを覚える。——郷土に語る——

落葉する頃(自修文)

壹

風物
けしき有機

(二)相馬御風がそ
の郷里糸魚川
でものした隨
筆集昭和六
年東京春秋社
發行

(Silhouette)
黒色の畫像、
我が國の影畫
の様なもの。畫
十八世紀の後
半フランスで
一時流行した。

(一)平安時代の歌
人。越前守大
江雅致の女。

山さとはは
つきの聲の
きふなれて
かせふかぬ
日はさひし
かりけり
連月

(二)浄土宗の尼僧
歌人。俗名誠。
京都に住んだ。
明治八年寂。
年八十五。
(三)京都市左京區
岡崎。

一二 冬の山里

さびしさに煙をだにも絶えじとて
柴をりくぶる冬のやま里

(一) 和泉式部



蹟筆月蓮垣田太

冬畑の大根の莖にしもさえて

あさとでさむし岡ざきの里

(一) 太田垣蓮月

神無月ふりみふらずみ定めなき

よみ人知らず

(一)江戸時代の歌
人。桂園と號
する。天保十
年。二五〇四
年。歿。年七十
六。

月前郭公
さやかなる
月のぬたに
もねほれぬ
を山ほとけ
きす鳴夜な
りけり
景樹

しぐれぞ冬のはじめなりける

てる月の影の散りくるこちして
よる行く袖にたまる雪かな

(一) 香川景樹



蹟筆樹景川香

こまとめて袖うちはらふ蔭もなし

佐野のわたりの雪のゆふぐれ

藤原定家

きのふといひけふと暮して飛鳥川

ながれて早き月日なりけり

春道列樹

(一)吉野朝の忠臣
正平九年(二〇一四年)薨
原抄、古今職
記等、神皇正統
記等の著かある

(二)延元元年(一九九六年)五月
足利尊氏、正平十三年(一九三四年)薨、
相語らふ

(三)醍醐天皇、後醍醐天皇の第三皇子、延元三年(一九三八年)薨、
藤原實世、正平十三年(一九三四年)薨、
新田義貞、吉野朝の忠臣、延元三年(一九三八年)薨、
内侍所

一三 吉野の行宮 北畠親房

(二)五月にも成りぬ。尊氏等西國の兇徒を相語らひて、重ねて攻上りぬ。官軍利なくして都に歸り參る程に、同二十七日また山門に臨幸し給ひけり。八月に至るまでたびく合戦ありしかど、官軍進まざりき。

十月十日の頃にや、主上山門より還幸。いとあさましかりし事どもなれど、尙行末を思し召す途ありしにこそ、東宮は北國に行啓あり。左衛門督實世卿以下の人々、左中將義貞朝臣を始めて、さるべきつはものも數多仕うまつりけり。

同十二月に忍びて都を出でましまして、河内の國に正成といひしが一族を召具して、吉野に入らせ給ひぬ。行宮を造りて渡らせ給ふ。もとの如く在位の儀にてぞましましてける。内侍所も遷らせ給ひ、

(一)源顯家、吉野朝の忠臣、北畠親房の子、延元三年(一九三八年)薨、
(二)義良親王、
(三)今大阪府泉北郡、堺市の南、
時や到らざりけん

(四)「もろとも」
昔の下には朽ちずしてうづもれぬ名を見ざるぞ悲しき
(金葉集、和泉式部)

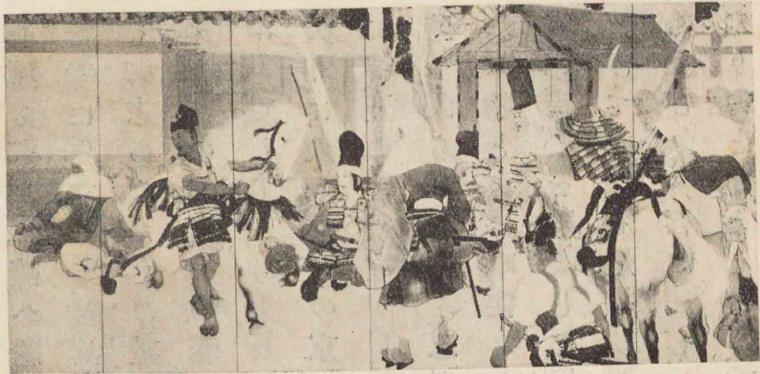
(五)京御府(山城國)綴喜郡木津川南岸の小山。頂上に八幡宮があつて、俗に八幡山、鳩峰などと呼んでゐる。
空しくさへなりぬ
言ふばかりなし

神璽も御身に隨へ給ひけり。誠に奇特の事にこそありしか。吉野の行幸に先立ちて、義兵を起すやからもありき。臨幸の後には國々にも御志あるたぐひ數多聞えしかど、次の年も暮れぬ。

またの年戊寅の春二月、鎮守府大將軍顯家卿また親王を先だて申し、重ねてうち上りぬ。海道の國々を悉く平げて、伊勢伊賀を経て大和に入り、奈良の京になん著きにける。それより所々の合戦數多たび、互に勝負ありしに、同五月和泉の國石津といふ所にての戦に、時や到らざりけん、忠孝の道此所にて極りにき。昔の下にもうづもれぬ物としては、唯徒に名をのみぞ留めし。心うき世にもありしかな。官軍尙心を勵まして、男山に陣を取りて、暫く合戦ありしかど、朝敵忍びて社壇を焼拂ひしより、事成らずして引退きぬ。北國なる義貞も、たびく召されしかど上りあへず、させる事なくて、空しくさへなりぬと聞えしかば、言ふばかりなし。

(一)源顯信。吉野朝の忠臣。正平年中戦死。

節度 儲の君



(筆雪關本橋) 幸 遷 御 野 吉

さてしも止むべきならずとて、陸奥の皇子また東へ向はしめ給ふべき定めあり。左少將顯信朝臣中將に轉じ、從三位に敍せられ、陸奥介鎮守將軍を兼ねしめて遣されぬ。東國の官軍悉くかの節度に從ふべき由を仰せられぬ。親王は儲の君に立たせ給ふべき旨申し聞かせ給ひて、道の程もかたじけなかるべし。國にてはあらはさせ給へ。となん申されし。異母の御兄も數多ましましき。同母の御兄も前東宮恆良親王、成良親王ましますに、かく定まり給ひぬるも、天命なればかたじけなし。七月の末つ方伊勢へ越えさせ給ひて、

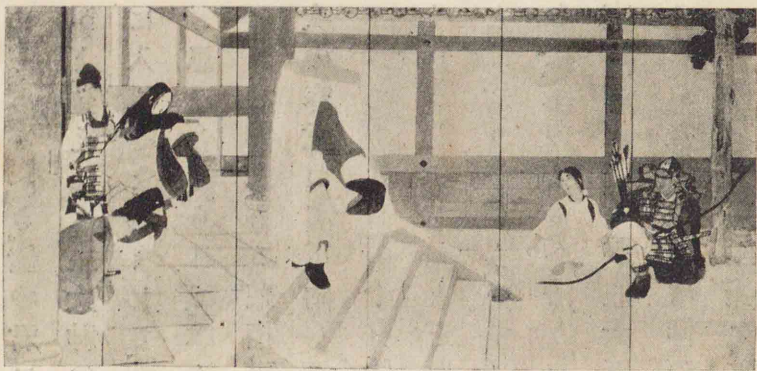
おどろしく

(一)伊豆半島の最南端の一角。一名石廊岬。

(二)愛知縣知多郡の篠島。

(三)霞ヶ浦。

めづらか



(筆雪關本橋) 幸 遷 御 野 吉

神宮に事の由を啓して、御船のよそひし、九月の初め纜を解かれしに、十日餘りの事にや、上總の地近くより空の氣色おどろおどろしく、海上荒くなりしかば、また伊豆の崎といふ方に漂はれたるに、いとど波風夥しくなりて、數多の船行き方知らずなり。にけるに、皇子の御船のみは障なく伊勢の海に著かせ給ひぬ。顯信朝臣はもとより御船にさぶらひけり。同じ風の紛れに、東をさして常陸の國なる内(三)の海に來著きたる船ありき。方々に漂ひし中に、この二つの船、同じ風にて東西に吹分けられぬ。末の世にはめづらかなる例

こはし
左中將道世。

(二)「ぬるがうち
に見るののみ
を夢といは
んはかなき世
なもつ」と
は見す(古今
集、壬生忠岑)

(三)藤原經忠。正
平七年歿。年
五十一。

(四)第十四代。

にぞあるべき儲の君に定まらせ給ひて、例なき鄙の御住居もいか
がと覺えしに、皇大神の止め申させ給ひけるなるべし。後には吉野
に入らせましまして、御目の前にて天位を嗣がせ給ひければ、いと
と思ひ合せられて、尊くもありしかな。また常陸は元より心ざす方
なれば、御志ある輩相謀らひて、義兵こはくなりぬ。奥州、野州の守も
次の春重ねて下向して、各國に就きにき。

さても八月の十日餘り六日にや、秋霧におかされさせ給ひて、か
くれましましぬとぞ聞えし。寝るがうちなる夢の世、今に始めぬ習
とは知りながら、かすく、目の前なる心地して、老の涙もかきあへ
ねば、筆の迹さへ滞りぬ。かねて時をも覺らしめ給ひけるにや、前の
夜より親王をば左大臣の第に遷し奉られて、三種の神器を傳へ申
されぬ。後の號をば仰のまゝにて、後醍醐の天皇と申す。

昔仲哀天皇熊襲を攻めさせ給ひし時、行宮にて神去りましまし

(一)第十五代應神
天皇。

宸襟

(二)正平二年(二
〇〇七年)八
月の河内國
大阪府藤井
寺の合戦、同
攝津國(大月
の合戦)阿倍
野の合戦。
(三)足利勢。
(四)足利尊氏。
(五)弟直義。

き。されど神功皇后程なく三韓を平げ、諸皇子の亂を鎮められて、胎
中の天皇の御代に定まりき。この君聖運ましまししかば、百七十餘
年中絶えにし一統の天下を知らせ給ひて、御目の前にて日嗣を定
めさせ給ひぬ。功もなく徳もなきぬすびと世に起りて、四年餘りが
程宸襟を惱まし、御世をすぐさせ給ひぬれば、御怨念の末空しくあ
りなんや。今の御門また天照大神よりこの方の正統を受けましま
しぬれば、この御光に争ひ奉る者やはあるべきなかく、かくて靜
まりぬべき時の運とぞ覺ゆる。

—神皇正統記—

一四 最後の參内

さても今年兩度の合戦に、京勢むげにうち負けて、畿内多く敵の
爲に侵し奪はれ、遠國また蜂起しぬと告げければ、將軍、左兵衛督の
周章、唯熱湯にて手を洗ふが如し。今は末々の源氏國々の備勢なん

どを向けては、かなふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直、越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國、中國、東山、東海二十餘箇國の勢をぞ向けられける。

京勢雲霞の如く淀、八幡(一)に著きぬと聞えければ、楠木帶刀正行、舍弟正時一族うち連れて、十二月二十七日吉野の皇居に参じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、父正成(二)尪弱(三)の身を以て大敵の威を碎き、先朝の宸襟を安め参らせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻上り候間、危きを見て命を致す所かねて思ひ定め候ひける。よつて、遂に攝州湊川にて討死仕り候ひ畢んぬ。その時正行十一歳に罷り成り候ひけるを、合戦の場へは伴なはで河内へ歸し、死に残り候はんずる一族を扶持し、朝敵を滅し、君を御代に即け参らせよと申し置きて死して候。然るに正行、正時既に壯年に及び候ひぬ。このたび我と手を碎き合戦仕り候はずば、且は亡父の申し、遺言

(一)山城國久世郡にある。今の京都府淀町。
(二)同國綴喜郡八幡町。
(三)藤原氏。吉野朝の忠臣。男山で戦死した。
(四)後醍醐天皇。

有待の身

にたがひ、且は武略のいひがひなき謗に落つべく覺え候。有待の身思ふに任せぬ習にて、病に冒され早世仕る事候ひなば、唯君の御爲には不忠の臣となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候間、このたび師直、師泰に駈合ひ、身命を盡し合戦仕つて、彼等が頭を正行が手にかけて取り候か、正行、正時が首を彼等に取りられ候か、その二つのうちに戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顔を拜し奉らん爲に参内仕つて候。と申しもあへず、涙を鎧の袖にかけて、義心その氣色に現れければ、傳奏未だ奏せざる前に、先づ直衣の袖をぞぬらされける。

傳奏

(一)第九十七代後村上天皇。

主上乃ち南殿の御簾を高く卷かせて、龍顔殊に麗しく、諸卒を照臨あつて、正行を近く召して、以前兩度の戦に勝つ事を得て、敵軍に氣を屈せしむ。叡慮先づ憤を慰する條、累代の武功返すノも神妙なり。大敵今勢を盡して向ふなれば、今度の合戦、天下の安否たるべ

(一)劉邦

下を萬世に傳へる事を希望し、自分を始皇帝と言ひ、子孫が第二世第三世より萬世に至るべき事を定めたが、皮肉にも帝の崩御後僅かに三年にして、二世皇帝がその臣の爲に弑せられ、四年目には三世皇帝が漢の高祖(一)に降参して、秦の國が滅びてしまつた。秦の始皇と言へば、支那第一の豪傑と言はれる人であるが、その豪傑が天下の權力を以てしても、やはり正當の道を踏まないで無理な注文をする事は、全くだめであるといふ事を、痛快に教へてくれた。ソロモンが一代の榮華も、竟に野生の百合に如かず、これでこそ神様が、我々に取つて有難いのである。

然るに世の青年の中には、往々秦の始皇にも劣らぬ無理な注文をする者がある。自分が勉強せずして立身出世を望んでみたり、或は自分が努力せずして、郷里の先輩の引立によつて、一足飛に好位置を得る事を考へたりする。かくの如き事を夢みる者は、恰も權力

(二)新約聖書マタイ傳第六章第廿九節
 モン(John)は昔西部アジヤ(今シリヤの南西部)にあつたイスラエルの王國第三代エルの王國第三治世はイスラエルの全盛時代であつた。西紀前一九七五年

も智力もない始皇の模造品が、立身出世の仙薬を需める様なもので、實に憫むべき話である。世の中には、一等の富籤を當ててみたいと、夢の様な事を考へてゐる人もあるが、斯様な都合の善い注文をつける人を、西洋の諺では、燒鳥が口の中へ飛んで來るのを待つ人とか、または、雲雀を捕へようとして天の落ちるのを待つ人とか言つてゐる。

故に私は茲に青年に告げたい。諸君等の立身出世には、何等の妙法がない。唯自ら助くるあるのみである。自ら勉強し自ら努力して、自己の運命を開拓する外に、出世の妙薬はないのである。立身には妙法なし。先づこの一語を信ずる事が、立身の第一歩であつて、そしてまた立身の最後の秘訣である。

古人も、凡そ事の成るは、成るの時に成るにあらずして、必ず由つて來るあり。と説いてゐるが、西洋では、神様の辭書には偶然といふ

奇功を奏す

文字なし。と言つてゐる。何事をも知つてをられる神様の眼には、別に偶然とか、不思議とかいふ事はない、すべて當然の原因のある所に、當然の結果が生じてゐるのみである。よく怠惰な學生が、平素勉強もせず、にゐながら、試験間際に徹夜の勉強をしたり、または巧に試験問題を推測して、僅かの勉強で奇功を奏する事を考へたりする。世間にもまた往々、平素注意さへすれば、何事もなく済むべき事をうち棄てて置いて、事件が発生すると俄に狼狽し、刃を渡る様な藝當を演じて巧に危険を免れ、得意顔をしてゐる者が多い。この種の巧妙は、實に愚かな巧妙である。青年の學ぶべき事は、この様な愚かな巧妙ではなくて、賢い平凡でなくてはならぬ。

圍碁の格言に、名人に妙手なし。といふ事がある。即ち名人は常に正々堂々一手をも忽にしないから、自然の大勢で平々凡々に敵に勝つのである。故に妙手を出して奇功を奏する必要がないのである。

(1) Pest (黒死病)
 (2) Robert Koch
 ドイツの細菌學者、病原菌の研究に功績多ク、結核菌、コレラ菌等を発見した。西紀一九〇四年。
 (3) 徳川氏の世子、直勝の長子。關ヶ原役、大阪あり、山城に淀城に封ぜられ、十萬石を領した。寛文八年(一七二八年)歿、年八十二。
 (4) 徳川氏の世子、直政の第二子。大阪冬の陣の後、近江彦根城に封ぜられ、城の陣に殊功あり、加封さる。領三萬石を治した。三十一(一七〇一年)歿、年七十九。

る。嘗て我が國にペストが流行した。その時ドイツから有名な醫者コッホ博士が來朝した。我が國の朝野の人が擧つてこれを歓迎して、謹んでその教を請うた。博士は種々研究した結果、教を垂れて曰く、「ペストを豫防するには、鼠を退治するのが近路である。凡そ生物を退治するには、その生物のうち勝つべき他の生物を蕃殖せしめるにある。故に鼠を退治するのは、猫を飼養するにある。」との事であつた。私は當時地方の警察部長として、防疫に従事してゐたので、成程眞理は平凡なものであると、大いに感心した。これに似た話は昔もある。嘗て徳川時代に、永井信濃守尙政が老中となつた時に、井伊直孝に教を請うた。直孝は容易に教へない。遂に齋戒沐浴七日間の後に、烏帽子直垂の大禮服を著用して、謹んで再び教を請うた時に、直孝は端然としてこれに告げて言ふ、唯油斷大敵の四字を忘るな。尙政もまた深く感謝して退出したといふ。私はこの物語を聞いた時

も、また成程眞理は平凡なものであると思つた。眞理は常にかくの如く平凡なものである。故に若し世の青年が、眞に立身に妙法なしといふ一事を、心肝に銘して奮起するならば、この一事既に諸君を成功に導くに足るのである。先づその依頼心を去れ。決して妙法を求めな。そして唯平凡な眞理の道を歩め。平凡な眞理の道とは何であるか。唯努力である。我の眞に恃む所は唯我あるのみである。

Alexandre
Dumas,
小説家。(西紀一八
七〇年)

アレキサンダー・デューマー曰く、我を救ふ者は何所にありや。曰く、爾の側にあり。これを知らずして他に求むれば、これより難き事なし。これを知りて自ら求むれば、これより易き事なし。これは面白い言葉である。眞に自己を救ふ者は、唯自己あるのみである。この一事をいかなる程度にまで深刻に理解するかといふ問題は、やがてその人がいかなる程度まで成功するかといふ問題である。若し此所

に人があつて、自分の頭上に帽子を被つてゐる事を忘却して、頻りに部屋や押入を捜し廻つてゐるとしたら、天下これ程滑稽な事はあるまい。しかしながら、今日の青年にして眞に神様の前に立つて、この男を笑ひ得る者が幾人あるであらうか。自分の力によつて自分を救ふ事を考へずして徒に他人に依頼し、自ら努力せずして徒に僥倖のみを冀ひ、賢い平凡の正道を歩まないで徒に愚かな巧妙の間道を走らうとする者は、すべて自己頭上の帽子を忘れて、これを部屋や押入に捜してゐる男と同一である。

天は自ら助くる者を助く。禍福門なし。唯これ人の招く所。聖書に曰く、我を呼びて主よ、と言ふ者、盡く天國に入るにあらず。唯これに入る者は、天に在す我が父の旨に遵ふ者のみなり。禮拜ばかりでは天國に行けない。神様の旨に遵ふ言行がなくてはならぬ。心だに誠の道にかなひなば祈らずとも神や守らんといふのも同じ

(一)新約聖書マタイ傳第七章第二十一節

Andrew Carnegie
製鋼家
共ニアメリカ
屈指の富豪
年七十一
西紀一九一三

教である。自ら努力せずしては、神様にも救つては戴けない。況やこの世智辛い世の中に立つて、自己の運命を開拓しようとする者が、いかにして他人のみに依頼して成功する事が出来ようか。
或人が米國の富豪カーネギーに致富の妙法を聞いた。カーネギーがこれに答へて、「富豪となるに最も必要な條件は、貧家に生れる事である。貧乏のどん底に生れて、貧乏の苦痛を骨髓に徹して味はつた者が、腹のどん底から奮起してこそ、始めて富者となり得るのである。生れながらにして銀のさじを口に入れた様な者が、どうして眞の富豪に成れようか。」と言つた。誠にその通りであらう。不撓不屈、堅忍努力の眞の覺悟は、艱難に遭遇して始めて得られるものであらう。王侯の家に生れた釋迦も、山中に入つて難行苦行の修養を積んで、始めて大悟したのである。
嗚呼、立身に妙法なし。眞理は平凡なり。汝を救ふ者は唯汝あるの

みである。自己頭上の帽子を忘れて、これを他に搜す者は誰ぞ。
——梅白し——

一六 人臣の道

北 畠 親 房

きほひ争ふ

前車の轍

(一)第七十五代崇徳天皇の御代、鳥羽法皇院政を攝せられた

凡そ王土に生れて忠を致し命を捨つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。されども後の人を勵まし、その跡を憐びて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてきほひ争ひ申すべきにはあらぬにや。ましてさせる功なくして、過分の望をいたす事、自ら危うするはしなれど、前車の轍を見る事は、誠に有難き習なりけんかし。中古までも、人のさのみ豪強なるをば戒められき。豪強になりぬれば、必ず驕る心あり。果して身を滅し、家を失ふためしあれば、戒めらるゝもことわりなり。
鳥羽院の御代にや、諸國の武士の源平の家に屬する事を停むべ

制符

語らばる

し。といふ制符たびくありき。源平久しく武を執りて仕へしかども、事ある時は宣旨を賜はりて、諸國のつはものを徴し具しけるに、近代となりて、やがて語らばる、やから多くなりしによりて、この制符は下されにき果して今までの亂世の基なれば、いひがひなき事になりけり。

この頃の諺には、ひとたび軍に駈合ひ、或は家子郎從節に死ぬるたぐひもあれば、我が功におきては日本國を賜へ。若しは、半國を賜はりても足るべからず。などぞ申すめる。誠にさまで思ふ事にはあらしなれど、やがてこれより亂る、端ともなり、また朝威の輕々しさも推量らるゝものなり。言語は君子の樞機なり。と言へり。あからさまにも君を蔑にし、人に驕る事はあるべからぬ事にこそ。堅き氷は霜を履むより至る習なれば、亂臣賊子といふ者は、その初め言葉

言語は君子の樞機
堅き氷は霜を履むより至る
亂臣賊子

を慎まざるより出で來るなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光

(一)堯の時の隱士

(二)支那河南省開封府

(三)堯の時の隱士

五臟六腑

萬姓の主

の變るにもあらず、草木の色の改るにもあらず、人の心の悪しくなり行くを末世とは言へるにや。昔許由といふ人は、帝堯の國を傳へんとありしを聞きて、潁川に耳を洗ひき巢父はこれを聞きて、この水をだにきたながりて、渡らざりき。その人の五臟六腑の變るにはあらしよく思ひならはせる故にこそあらめ。

尙行末の人の心想ひやるこそあさましけれ。大方おのれ一身は恩に誇るとも、萬人の怨を残すべき事をばなどか顧ざらん。君は萬姓の主にてましませば、限りある地をもちて、限りなき人に頒たせ給はん事は、推しても量り奉るべし。若し一國づつを望まば、六十六人にて皆ふさがりなん。一郡づつといふとも、日



(筆折不村中) すま飲に流汚父巢

(一) 平良將の第三子。下總國猿島に偽宮を建てて朝儀に擬へた爲に天慶三年(一六〇)遂に誅せられた。

(二) 漢の第一代の皇帝姓は劉、名は邦、漢を帷幄の中にめぐらす。

本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は悦ぶとも、千萬人の人は悦ばじ。況や日本の半ばを心ざしみながり望まば、帝王はいづくを知らせ給ふべきにかかゝる心の萌して言葉にも出で、面にも恥づる色のなきを、謀叛の初と言ふべきなり。昔の將門の比叡山に登りて大内を遠見して、謀叛を思ひ企てけるも、かゝるたぐひにやありけん。昔は人の心正しくして、自ら將門に見も懲り聞きも懲り侍りけんを、今は人々の心かくのみなりにたれば、この世は愈衰へたるにや。
漢の高祖の天下を取りしは、蕭何、張良、韓信が力なり。こを三傑と言ふ。萬人に勝れたるを傑と言ふとぞ。中にも張良は高祖の師として、籌を帷幄の中にめぐらして、勝つ事を千里の外に決するはこの人なり。と宣ひしかど、張良は驕る事なくして、留と言ひて少しきなる所を望みて、封ぜられにけり。あらゆる功臣多く亡びしかど、張良

(一) 後鳥羽天皇の文治五年(一八四九年)藤原泰衡。
(二) 畠山重忠。
(三) 昔奥州は五十郡あつた。

(五) 國文學者、文田大學教授。早稲田大學教授。山形縣に生れた。形新文章講話、國歌の胎生及び物語研究等の著がある。
(六) 第四十二代。

は身を全くしたりき。近き世の事ぞかし、頼朝の時までも文治の頃にや、奥の泰衡を追討しに、みづから向ふ事ありしに、平重忠が先陣にてその功勝れたりければ、五十四郡のうちいづくをも望むべかりけるは、長岡の郡とて、極めたる少き所を望みて、賜はりけりとぞ。これは人に廣く賞をも行はしめん爲にや、賢かりけるをのこに

神皇正統記

一七 明淨直

五十嵐 力

文武天皇が御即位の際に下された宣命の中に、明き淨き直き誠の心といふ詞がある。我等はこの「明き淨き直き心」が、日本人の性質の核となり中心となるものであると考へる。この詞は代々の詔敕に幾度も繰返されてゐる。しかも重きを措いて繰返されてゐる。その他、古事記、日本書紀、萬葉集などにも、重々しい場合に幾度も

賦與

用ひられてゐる。これは畢竟我等の祖先が心の中に深く感じた事、大和民族に最も濃く、最も多量に賦與された性質が、自然に口を衝いて出たのではあるまいか。世に大和民族の特性と稱せられる現實、光明、活動、向上、中庸、快活、忠孝、清廉、勇武、義俠、風雅などの諸性質は、概ねこの明、淨、直の三大性質を基本として説明されるらしく、殊に三種の神器がこの三大性質の標章として遺憾がない様に思はれる。次に、抽象的ではあるが、一通りその理由を説明しよう。

鏡の性は明で、その徳は玲瓏透徹に物を映ずる事である。日本人は鏡の様な明き心で、正しく事物を観た。故にその觀方は概して公平無私で、赤い物は赤いとし、黒い物は黒いとし、善行に對しては我を忘れて歎美し、悪行を見ては敢然として排斥するといふ傾があつた。天照大神は鏡を齋きて、我が大御前を見るが如くせよ。と仰せられた。全國無數の神社には、その鏡が神體として齋かれてゐる。詔

折衷性

敕や、祝詞や、君臣應對の詞などに、明き心といふ語が澤山用ひられてゐる。これ等は何れもこの性質が、我が國民の心底に根深く植附けられてゐる證據であると思ふ。我が國民の中庸性、折衷性、調和性も、一面この根本性質の結果であらう。我が國には、政治、社會、宗教などの諸方面にわたつて、諸外國に見る様な非常な大衝突はない。全くないではないが、割合に少く、また何時もそれが調和する傾がある。例へば、異主義が新たに外國からはいつて來たとする。毛色が變つてゐるので、暫くは新舊相争ふが、やがてお互にそれには道理も無理もある事を解すると、ばからしくなつて、最早争論が續けられなくなる。そこで、騎虎の勢の意地喧嘩は止めにして、長短取捨の調停をする。萬事がこの通りである。僅かあれだけの騷亂で明治の維新を見たのも、平和の裡に憲法を得たのも、君臣、父子の親和も、萬世一系の國體も、一面皆「明」といふ基本的國民性の賜ではあるまいか。

騎虎の勢

(一)新納武藏守忠元の作

(二)エルサレム聖地を同教徒であるトルコ人から奪ひ還す爲に起した戦役(西紀一〇九六年)從軍者○九六(一)の右肩に赤十字の記章を附けた故にこの名がある。
(三)西紀一七八九年佛國ルイ十六世の時一起つた革命。一七九二年成立した。年鎮定した。五洞然

馬上に天下を得た武將が文藝の獎勵に骨折るのも、群雄割據の亂世に陣中かゞり火の下で古今集を讀む武將のあるのも、同じく戰國時代に敵ぞとて何かは人の憎からん同じ御國の同じ身なればと詠んで、敵を同胞として愛した勇將のあるのも、武士が僧侶に親しみ、僧侶が武士に盡すのも、乃至さつぱりと腹を切るのも、一は事を見る事が明らかであつて、理に従ふ事が流れる様な根本性によるのではあるまいか。大和民族は十字軍やフランス革命の様な極端な狂言を演ずるのには、餘りに心が明る過ぎる傾がある。我等は、日本人を公正と言ひ、理に鋭いと言ひ、感情の平靜を保つと言ひ、何事をも受容れる胸懷の洞然たる人種であると言つた外人の批評は、あながちでたらめの空世辭ではないと思ふ。
清淨の徳は玉に於て絶好の標章を得てゐる。淨と明とは似てゐるが、同じではない。その違ふ趣は、丁度鏡と玉との違ふ趣に似てゐる。

溷濁

澄徹の趣

むくつけし

る。汚穢溷濁を忌む事は、清明共に同様であるが、清はそれ以上に味はひのあり温みのある事を要する。譬へば、鏡は空白で正しく物を映すれば足りるが、玉は必ずしも空白で物を映する事を要しない。で、温潤の光、圓融の相、澄徹の趣のある事を要する様なものである。本來日本人は、明らかに事物を見る長所を有するばかりでなく、外物を看るのにも、自己を發表するのにも、一種の味はひのある態度を具へてゐる。その明は空白の明ではなくて、温潤、圓融、澄徹の趣味を加へた明である。硝子の明ではなくて、水晶、夜光珠の明である。我が國では、古來、**禊祓**が多く行はれ、廣く用ひられ、且重要視されてゐた。祝詞、宣命を始めとして、多くの歌詠、諷謠は明き心を現しながら、趣味、風韻に富んでゐる。しかもその趣味や形容が、諸外國例へば支那の文字に見るが如き、張子の虎の様な誇張の弊がなく、よくその實を現し、中味に相應した修飾を纏うてゐる。むくつけき武人にも、

(駢)

戰陣の間に花をかざし、歌詠を贈答し、或は胃に香を焼きしめるといふ様な嗜があつた。上流社會は言ふに及ばず、市井の民に至るまで、一般にそれにふさはしい文字をもつてゐる。外國出稼の労働者が、その日の生活に窮しながらも、尙一二の植木鉢を持たぬ者はなく、そしてこれは外國の労働者に絶えて見ない所と言はれてゐる。大工、指物屋の手に成るはかない家具や細工物も、西洋の表面だけ美しく、裏面の粗末なのに反し、我が國のは見えない裏面にまでも手を盡すといふ嗜がある。これ等は何れも大和民族が清きを愛する根本性の現れたものではあるまいか。我等は日本人は世界第一の審美眼を有する國民にして、貴族より労働者に至るまで皆美術を愛翫す。と言つた一外國人の批評が、必ずしも虚妄でないと思はるのである。

審美眼

直は正を意味し、勇を意味し、決斷を意味し、直前直往を意味する。

首鼠兩端

(一)「父母を見れば尊し、妻子見ればめぐし、云々」
 (二)「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍、大君のへにこそ死なむ、かへり見ばせじ、(萬葉集、大伴家持)」

その厭ふ所は躊躇、緩慢、首鼠兩端である。曲る事、拗れる事、邪な事である。叢雲の劍はその標章としてこの上なくふさはしい。元來直の徳の本領は、心の明らかに見た所に向つて直前するのにある。若し右の三徳を一括してこれを一體と見れば、明はその靜的方面即ち知の方面で、直は活動方面即ち意の方面である。知の明らかに見た所を意が直進して實現する。そして知の見方、意の働き方に、潔く一言ひ知らぬ味はひのあるのが、邦人固有の性格と言ふべきであらう。明き心を以て、父母を見れば尊し、妻子見ればめぐし。故にその明き心の示す所に従ひ、直前して父母に事へ、妻子を愛しむ。君を仰げば、八隅知し太君、現つ神として國に臨み給ふ様が、限りなく高く貴い。故に直前して、海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍の獻身的奉公を致すのである。そしてその君父に事へ、妻子を愛しむや、多くは水臭い思慮、分別、利害勘定の結果でなく、眞實掬すべき趣があつた。

(一)hero.
(二)弘安四年。(一
九四一年)

此所が眞淵、宣長等の國學者が感歎し、自負して措かなかつた點である。無論どこの國にも、文化の進まぬ時代には、斯様な自然的の性向があつたであらうし、大和民族にも利害勘定の行爲がなかつたとは言はれないであらう。また自然眞實の行爲に弊害が伴はないとも言はれないであらう。けれども、我が民族の特徴の一面は、とにかくこの點に存した様に思はれる。その例は、遠い昔では、素戔嗚尊に見る事が出来る。あの日本武尊も素戔嗚尊系の勇者である。次いで、鎮西八郎爲朝の腕白、勘當、九國押領、召還、保元の勇戦、大島配流の一生、これも素戔嗚尊系の大立者。これ等何れも向ふ見ずの様でありながらも、妙に情に厚い所があり、君父の事とあれば、水火も辭せず直前するといふ風があつた。直斷、決、勇の權化で、確かに大和民族固有性の一面を背負つて立つヒーローであつた。その他、蒙古來寇の時に西海の將士が身命を捨てて防戦した態度を見よ。

(一)高橋蟲曆の歌
萬葉集にある。

(二)和田義盛の三男義秀。安房國朝夷郡(今、千葉縣安房郡)に成長したのて、朝比奈と稱した。豪勇無雙の士。
一轍者
豁然大悟
依怙
利潤
(三)山本常朝の著で俗に「鍋島論語」と稱せられる「葉隠」中にある詞
金誠

代々の武士が、千よろづの軍なりとも言あげせず取りて來ぬべき男とぞ思ふといふ様な斷乎たる覺悟を見よ。畠山重忠や加藤清正の如く、竹を割つた様に正直な豪傑が國民に尊崇されるのを見よ。曾我五郎朝比奈三郎の様な一轍者が國民に愛せられるのを見よ。豁然大悟の禪宗が盛んに行はれたのを見よ。眞偽は知らないが、正直は一旦の依怙にあらずと雖も、遂に日月の憐みを蒙る。謀計は眼前の利潤たりと雖も、必ず神明の罰にあたる。といふ戒が、天照大神の御言葉として神道家に唱へられてゐた。武士には「七息思案」といふ格言があつて、分別も久しくすればねまる。武士は物事手取早くする者ぞ。といふ事が、武士道の金誠になつてゐた。これ等は何れも直を好む性質が、大和民族の心性の基本、精髓をなしてゐる證據なのである。

(一)倫理學者。廣島文理科大学教授。八分。生れた。日本史學文化、神道、日本史學史、等の著がある。

誓約 是非曲直を判する時、神に誓ひを立つて、その誓ひの通り、か否か表れる。神意を判する。神事。玉や剣を祀る。男女の神を祀る。生さざれば。よつて是非曲直を判する。素戔嗚尊が勝たれた。

自修文

光明を尙ぶ精神

清原貞雄

公的に生活して、私的個人生活を理想としない日本國民は、自然の結果として、光明を尙ぶ精神をもつてゐる。我が國民は古來赤き心を尙ぶ國民である。公明正大で少しの暗い所もない朗かな心が「赤き心」である。「赤き心」は「明き心」であつて、丹心、赤心、清明心などの文字が當てられ、「あかき心」も「よき心」なども言はれてゐる。このあかき心を尙び、あかき心をもつ事が日本國民の誇である。素戔嗚尊が高天原で天照大神の爲にその心事を疑はれた時に、誓約によつてその心のあかい事が證明されたと言つて、大いに得意の様を現された神話がある。

日本國民の信仰上の最大最高の目標は、言ふまでもなく天照大神である。天照大神は日本國民の大祖としてこれを奉戴するのであるが、同時に太陽神として崇敬されてゐる。太陽は光明の

投影 北歐神話 古代のスカンディナヴィヤ(今のスウェーデン、ノルウェー、デンマーク、アイスランド)に住んだ民族に傳はつた神話。印度の神話 印度に移住したアールヤ民族の間に發達した神話。

本源である。國民信仰上に於ける最大最高の神を、光明の本源である所の太陽と結び附けてゐる所に、我が國民の光明を尙ぶ精神が十分に現れてゐると思ふ。我が國民が古來白色を尙んで來た事、殊に神道に於てそれが著しい事も、白の色がもつ所の明るさを尙ぶのである。勿論神道に於ては、清淨を尙び、その無垢無染といふ清らかさを尙ぶ所から來てゐるものもあるが、明るさといふ事もある。否、清らかさと明るさは元々共通のものである。國民思想、國民信仰の投影とも言ふべき神話その物が、既に光明を尙ぶ精神的特色を表現してゐる。明るく朗かな氣分。――これが我が國の神話のもつ最も著しい特色であつて、他國の多くの神話に見る様な陰慘な氣分は少しも現れてゐない。例へば、北歐神話にしても、印度の神話にしても、陰慘な物語が可なり多く含まれてゐるのであるが、我が日本の神話には斯様な物語は殆どない。

黄泉國 夜見國と同じ、
 暗黒の世界で、
 死の國を指す、
 常闇 永久に暗黒な
 こと。
 さばへなす 五月の頃の蠅
 の様に。
 荒ぶる神 亂暴する神。
 八百萬の神々 國民の祖先で
 ある無数の神
 神。
 天の安の河 瀨瀨の河、即
 ち幾瀬もある
 廣い河、或は
 銀河といふ。
 常世の長鳴鳥 常世は常夜
 (常闇に同じ)、
 長鳴鳥は雞の
 こと。
 世をはかなむ 世の中を定め
 なく思ふこと。
 無常を感じる こと。

我が國には光明と歡喜とに満ちた高天原の神話はあるが、かの佛教などでいふ暗黒陰慘な地獄に相當するものは認められない。死者の行くべき世界として黄泉國の物語はあるが、決して地獄物語に對比すべきものではない。光明の神天照大神が天岩戸に隠れまして、天の下が常闇になつた時には、さばへなす荒ぶる神々が所を得顔に荒びて、國民は大いに困つたのであるが、國民は斯の如き際に於ても、決して屈託したり、悲觀したり、失望落膽したりする事はなく、八百萬の神々は直ちに天の安の河原に集つて、盛んに火を燎やし、黎明を象徴する所の常世の長鳴鳥を鳴かしめ、天鈿女命をして滑稽な舞踊をなさしめ、八百萬の神々の笑ふ聲が高天原を揺動かしたとある。勿論これは神話物語であるが、斯様な神話物語は、光明を尙ぶ國民の精神から生れたものである。

かるが故に、國民は樂天的である。常に物を明るく見る。世をは

(一) 萬葉集卷六、
 海犬養宿禰、
 廣の御民たる私
 はしひんぐと
 生きがひんぐと
 であると思ふこと
 とある。この
 天地の繁榮を
 極めてある時
 に生れあつた
 ことを思ふと
 の意。
 (二) 平安時代の文
 學者、清原元
 輔の女、第六
 十六代一條天
 皇の中宮定子
 に仕へた。
 (三) 面白い季節は
 正月、三月、四
 月、五月、七月、
 九月、十一月、
 十二月である
 が、總體その
 季節々々に
 いて一年中
 白いとの意。

かなむ思想は元來ない。物は見方に依つて明るくも暗くも見え
 る。すべての物を明るく見るのが日本國民の特性である。悪人は
 すべての事がらを悪意に解し、善人はすべての事がらを善意に
 解釋する。自ら明るい心持をもつてゐる者は、すべての事がらを
 明るく見るのである。

御民われ生けるしるしあり天地の
 さかゆる時にあへらく思へば

この歌こそ、日本國民の物の見方を代表したものである。勿論
 一種の厭世思想の發生した事も否定する事は出来ない。しかし、
 それは多くは佛教の厭世的な思想の影響である。平安時代の貴
 族が頹廢的な暗い思想に陥つてゐた事は、當時の物語類を見れ
 ば直ちに看取される。しかし、同時代の清少納言はその隨筆枕草
 子に、ころは正月、三月、四月、五月、七月、八月、九月、十月、十二月、すべてをり
 につけつゝ、ひとゝせながらをかし。と言つて、日本人特有の明る

(一)比叡山の東塔の本堂、當山最初の建立、國寶建造物である。

い見方をしてゐる。これが本來の日本精神なのである。今一つ日本國民の光明を尙ぶ精神を現してゐるのは家屋である。殊に我が固有建築の典型であるとせられてゐるのは神社建築に於てそれが著しい。概して宗教に關する建築物には陰鬱な物が多い。基督教會の如きは宗教的建物としては明るい方であるが、普通の我が國の家屋に比較すると、餘程陰鬱に出來てゐる。佛教の寺院建築に至つては一層それが甚だしい。就中、天台宗、眞言宗などはその極端な例である。天台宗の總本山延暦寺の根本中堂に參詣した人は何人も知つてゐる事であるが、案内者は日中でも蠟燭を點して案内する。それ程暗く出來てゐるのである。佛教で極樂淨土の事を一に寂光土じやくくわうどと言ふ。寂光土は後世發達した佛教では色々むづかしい理窟を附けてゐるが、本來の意味は、幽な光の國といふ事である。光明よりも寧ろ薄暗いのを理想とする考へ方から、極樂淨土を寂光土と言つたので、天台宗や眞言宗

照應
てらし合ふこと。

屈託
或事のみを心配すること。
(一)思想問題に關する講演を記したものを昭和六年明治昭行株式會社發行

などで佛を安置する本堂を薄暗くする所以も此所にある。然るに神社の建築は四方開放してある。これは佛教建築と極めて顯著な對照をなしてゐる。國民が樂天的の氣分に富んで居り、物事を悲觀的に考へる事をしないといふ事と、この光明を尙ぶ精神とは、相照應するのである。或は樂天的であり、餘り氣分の明る過ぎる日本には、深淵な哲學は生れないと言ふ者がある。これは多少理由のある言分である。

しかし、佛教の陰鬱で厭世的な思想の、遂に印度を亡してしまつた事を考へる時、吾人は日本國民が光明を尙ぶ精神をもつてゐる事を、遺憾に思つたり、卑下したりする必要は更にないと思ふ。光明を尙ぶ物に屈託せず、若々しさを永久に失はず、常に朗かな心持を有し、萬難を排して進んで行く勇氣を失はない間は、我が帝國の前途は洋々たるものであつて、國を護るこの精神こそ、國の寶であると言はなければならぬ。——日本國民の精神——

(一)江戸時代の儒者、博物學者、筑前の人、正徳四年(一三三七)歿、八十五、本草、懐志録、大和俗訓、樂訓等の著がある。

心づからつとめて

四つの始

はだれ

一八 春の樂しみ (一) 貝原益軒
春は先づ一夜の程に、あらたまの年立返る朝の空の光、心づからにや、古年に變りてのどけし。睦月はことだつとて、貧しき家にも春盤などいふ物を設く。また土器取出で、大御酒進めて、先づつとめて父母にことぶきし。次に自ら祝し、賓客にももてなす様など常に變りて、いとなんいみじうめづらかなる。時は今は四つの始なれば、空の景色やうくひきかへ、こち風ゆるく吹きて、氷解け、遠き山邊に霞の薄くたな引ける、さまざまにもものけざやかに見えて、冬の空に立變れる装、先づ春の來れるしるしあらはなり。垣根隠れに冬より残れる雪の所々はだれに見ゆるも、去年の名残を惜しむべし。待ちわびし梅の匂、百花に先だち、春の消息を得て喜ぶべし。谷を出で高きに遷る鶯の、春を迎へても、もの若き聲、初春の初音の今日に逢へる、

(一)「花ならで身にしむものは鶯のかをらぬ聲のほひなりけり」(風雅集、道円法師)なづさふ
(二)「常磐なる松の緑も春來れば今一入の色まさりけり」(古今集、源宗子)
(三)韓愈のこと。唐の文豪。字は退之。長慶四年(西紀八二四年)歿、年五十七。
(四)清少納言。
(五)「日の光敷しわかればいその上ふりにしり」(古今集、布留今道)日永くして少年の如し

耳とまりてこひしく、花ならで身にしむものならし。花を愛で、鳥を羨むはこれ先づ春の賜なり。これを始として、尙行くさき遙かに榮ゆる春の豊かなる惠たのもし。千年も経べき緑の松も、今一入の色を増して、常に見馴れしもしや珍しくなづさはれぬ。韓文公が「最是二年春好處」と言へりしは、早春のけしき、一年のうちにて殊にめづらかに勝れたる故なるべし。
如月の程より、よろづ皆冬の心盡きて、空の色麗かに氣色だちて、四方山も霞こめたる装、殊に曙の景色譬ふべき物なくあはれむべし。古の人「春は曙」と言ひけんも宜なるかな。日の光敷しわかれば、數ならぬ垣根の内も、冬に變りて輝き出で、草木生ひて皆顔色を生じ、花待ち顔になごやかなるけはひ嬉し。日影もやうやく長閑になりもて行けば、人の業も古年より暇ありていそがはしからず。日永くして少年の如く、心靜かにゆたけし。海の面日和よく、浦山も麗かに

老いみいはけ

(一) 周代の哲學者
莊子。孟子と
同時代の人。
(二) 唐の詩人杜甫
同じく唐の詩
人杜牧に對し
て老杜と稱せ
られる。

消えがて

霞みわたりたる景色いと遙けし。夕づけて日は既に入りぬれど、残れる光尙久しきは、日の永きしるしなるべし。この頃は陽氣の昇るけにや、童ども紙鳶といふ物を作り、長き絲つけ、風に任せて放てば、高く上り、雲の上まで遙けくたなびくを戲とすれば、老いみいはけみ、空を仰ぎ見るもをかし。野にはまた絲遊といふ物霞の如く地より立騰れり。またかげろふとも言ふ。莊周はこれを野馬と言ふ。老杜が詩に「落花遊絲白日靜」と言へるもこれならし。これ皆常にはなきものなるが、春めきていと珍し。また垣根の草早く萌出づるを見るにつけても、春の氣は下より昇るけぢめいと明らけし。花もやうやう咲續きて、梅花既にうつろひて後新たなるは、我が國ならぬ唐桃の花なるべし。桃紅なるはたなびく雲の面影に立つ心地す。李白きは消えがての雪の梢に残れるかと思えて、いと麗し。櫻の綻び出でたるこそ、花に心はなけれど、人の心を動かして、え

けおさる

(一) 續古今集、藤原爲家の歌

うしろめたし

ならぬ眺なれ。これ我が日の本にて、四時の花の多き中にも、第一の見物なれば、梅散りて後、この頃の異花は皆けおされぬ。されど日ごろ待たせく、てやうく、咲けるが飽くまで見る程もなく、疾く散るはまた恨めし。

よしさらば散るまでは見じ山櫻

花のさかりを面かげにして

と古の人の詠みけんも、後の思出にせんとにや、情深し。このをりから春雨のしきく、降れば、我が宿の園の櫻はいかにあるらんとし。うしろめたし。柳翠に花紅にして、春の色を描き出せるは、いと麗しき眺なり。

春やうく、深くなれば、風やはらかに日暖に、百草芳を争ひ、群花艶を競ふをりなれば、何れの所か春のなからんや。かゝる景色に觸れては、人の心も浮立ちて、思ふどちかいつらね、春を尋ねてあくが

(一)「驪子春猶隔、鶯歌暖正繁。」
 (二)宋の人。名は搏。希夷は號。太祖に仕へた。
 (三)「春宵一刻直千金。花有清香。月有陰。」
 歌管樓臺聲寂寂、
 寂、
 夜沈沈、蘇東坡、
 (四)宋の人林希逸の詩句。
 (五)「あたら夜の月と花とを同じくは心知れらん人に見せばや。」後撰集、源信明、
 (六)宋の人周彌の詩句。

れ歩き、ひねもす花を眺め暮すこそ、目を恣にし、心を快くするわざなれ。世の中のいみじく嬉しき事のあるが中なるその一つなるべし。我が心の樂しみを知らざる人は、無頼の少年の閑を偷みて、そろに行樂するに似たりと思ふべし。芳草雨後に秀で、好花風裏に空しきもこのをりなり。杜甫が詩に、「鶯聲暖正繁」と言ひ、陳希夷が「野花啼鳥一般春」と詠ぜしも、皆この時なり。

花の夕映を見るも、殊に色勝れる心地ぞすなる。花に坐し、月に酔ひて、二つながら兼ねたる樂しみ、春宵一刻直千金。花有清香、月有陰」といふ詩を思ひ出でられぬ。また、「惜花朝起早。愛月夜眠遲」と言へり。古人はかくこそ月花を愛でしに、今の人のあたら夜の月と花とにそむきて、空しく臥すはいと惜しむべし。また夜の間の風のうしろめたきをも知らず、朝起くる事おそきは、花を惜しまざるなり。この頃夕暮は遠き山邊の焼けぬるも、目立つべき見物なり。されば春風

(一)白居易の詩句。
 (二)支那南北朝時代の詩人謝靈運が夢中に得たといふ詩句。
 (三)京都府(山城國)綴喜郡、山吹の名所。
 目かれせずながめがちなり
 (四)「巨勢山のつらつら椿つらつらに見れどもあかす巨勢の春野を。」萬葉集、阪門人足、
 いどまし

入、^(一)燒痕、^(二)と言ひ、また野火燒不盡。春風吹又生、^(三)と言へるも、燒野の草を詠ぜしなり。古詩に「池塘春草生」と言へりしは、この頃の眼前の景色を唯ありのまゝに言へるなるべし。

彌生も半ばなる頃、八重山吹の風に翻るは、井手の渡も見る心地して賑はしければ、目かれせずながめがちなり。春の花の多かる中に、唯山茶のみ異花にかはりて盛り久し。殊更つらをなして植ゑたるつらつら椿、つらつらに見れども飽かず。階のもとに薔薇も夏を待ち顔なり。

すべて春は草木の花先立ちおくれ、いやをちにいどましく、遅く疾く咲續き、醗酵に至りて花の事終りぬるは、名残惜しと見ゆ。春の花は何れとなく咲出づる色、殊に目驚かれぬるに、心短くて早く散りぬるは怨めし。九十の春光はいと長けれど、何くれとまぎらはしく、風雨もまたしげければ、爲す事なくはかなく過ぎて、とゞめあ

(一)惜しめども
春の限りの今
日の日の夕暮
にさへなり暮
けるかな(二)後
撰集よみ人
知らず

へぬ春の限りの今日の日の夕暮にさへなりぬ落花寂々たる黄昏
の時は、春の名残いと惜しむべし。蘇子瞻が「青雲還一夢」と言へる、う
べなるかな。

樂訓

(二)宋の文豪蘇軾
號は東坡。子
瞻はその字。
徽宗の初年
(西紀一一〇
一年)歿年六
十六

一九 敕撰和歌集

窪田 空穂

山河襟帯の王城の地名も優しい平安京は、繪の様に美しい都で
あつた。佛教の汚濁を潔めて、更始一新の政治を試みるのには、誠に
ふさはしい所であつた。此所に入々は善政に恵まれ、治平を樂しん
だ。そして唐風の模倣から漸く脱して、我が國固有の文化を生まう
とする氣運さへ生じた。その時流に投じて、更にこれを馴致した者
は、實に平安宮廷の公卿たちであつた。

平安朝の初期以來、權力を持ち、知識を持つてゐた廷臣に取つて、
歌はその藝術慾を満す殆ど唯一の物であつた。しかも彼等の多く

物語

耽美的

は、或は殿上に、或は自邸に、或は物語に、明暮れ安逸單調な生活を送
つたから、その耳目に觸れる四季をりくくの自然の變化こそは、彼
等の心を刺戟して餘りがあつた。

そして風光明媚な平安京の自然の中に、彼等はおのづから耽美
的に傾いて行つた。彼等は美にあこがれた。人間生活の上に、自然の
風光の上に、一意、美を求め、美を追ふ者となつてゐた。美に浸り得て
彼等は喜び、美を求め得ないで彼等は悲しんだ。随つて彼等は機智
を愛し、繊細な技巧をも愛する者となつてゐた。そして彼等は自分
たちを壓迫する漢詩と長く拮抗して來たが、今は漢詩の長所であ
る思想的な、また複雑した味はひをも歌に取入れる様になつた。在
原業平や、小野小町、僧正遍昭など六歌仙と謳はれた人々、更に延喜
の世に輩出した紀貫之、凡河内躬恆、紀友則、壬生忠岑などの歌道の
名手によつて、和歌は愈々盛んになつて、嘗てなかつた新しい歌風を

理性は
繊細な技巧
拮抗する

(一)平安時代の歌
人。出羽國郡
司の女。

(二)平安時代の歌
人。俗名は良
岑宗貞。寛平
二年(一五五
十年)歿年七
十五。

も生じた。

春立ちける日よめる
袖ひびてむすびし水の凍れるを

紀貫之

立春の日に氷が解けると言ふ事は、事實としてはないであらう。しかし、それをあるべき事とするのは、歌人の構想である。その氷は、夏の暑い頃、袖をびしよぬれにぬらしながら、掬つて遊んだ水が、冬になつて凍つたものだとする。複雑にしようとして、却つて不自然にさへしてゐるが、また全體の技巧は巧みなものである。これは當時の歌風の一つであつた。

白菊の花をよめる

凡河内躬恆

心あてに折らばや折らん初霜の花
おきまどはせる白菊の花

初霜が眞白に置いて、其所に咲いてゐる白菊の花と一様になつて、何れが霜か、何れが花か分らない様になつてゐる。しかし、推量で折つたならば、或は白菊を折取れようかと言ふので、甚だしい誇張である。しかしその誇張は、白菊の花と初霜との一つになつた清らかさを、力強く言はうとする耽美的氣分からのものである。これがまた當時の歌風の一つであつた。

かくして和歌道は、咲きひらいた花の様に隆昌を極めた。茲に醍醐天皇は當時の四歌才に命ぜられて、平安奠都以來百年間に、多くの人々によつて詠まれた數ある歌の中から、特に秀歌を選ばせて獻らしめられた。これが敕撰集の嚆矢古今和歌集である。その選抜いた歌は千首餘り、これを四季賀、哀傷などに類別して、二十卷としてある。

抑、宮廷には尙古の思想が濃厚で、上代を崇び、先例を重んじられ

(一)第六十代

る風が盛んであつた。當時萬葉集は敕撰集であると信じられてゐたから、醍醐天皇もまたこれに倣つて、敕撰の和歌集を編ましめようと思ひ召されたのである。古今和歌集は茲に新たに敕撰和歌集の先例を作つた。そして後代、相繼いで屢、敕撰の御企があつた。即ち何れも時の代表歌人を撰者として、その時代々々の名歌を撰び編ましめられたのである。

この敕撰和歌集の編纂は、室町時代(一)後花園天皇の永享年間(二)に出來た新續古今和歌集まで、二十一代に亙つて行はせられた。それ故これ等の敕撰和歌集を、後世二十一代集と稱する。

隨つて當年の歌人に取つて、最高の榮譽とする所は、自己の歌が選ばれて敕撰集を飾るといふ事である。代々の歌人は、敕撰の譽を贏ち得ようとして、作歌三昧の生活をした。

かの平忠度(三)が一門と共に西國に走らうとして、特に馬を返し、そ

(一) 第百二代。
(二) 永享十年、二〇九八年。

(三) 平安時代の歌人。忠盛の子。永三年(八四四年)の谷で戦死した。年四十一。

(一) 平安時代の歌人。姓は藤原。定家の父。千載集を撰んだ。元久元年(八六四年)歿。年九十一。

(二) 古今、後撰、拾遺、後拾遺、拾花、金葉、千載、新古今。

の師俊成卿の門を敲き、一卷の詠歌を託して、この後、撰集のさたある時、せめて一首なりとも敕撰の榮に浴さうとした、あはれにも優雅な物語は、よく當時の歌人の心情を傳へてゐる。

和歌が世の治亂を外にして盛んであつたといふ事も、畢竟はこの敕撰和歌集に刺戟されたからであらう。かくして敕撰和歌集は我が國の文化の上に貢獻する所が少くなかつたのである。

二十一代集の中でも、有名なのは第一の古今和歌集から、第八の新古今和歌集までの八代集である。その中でも殊に名高い古今、新古今の二歌集は、實に敕撰集を代表するものであると共に、後世の文學に影響する事も極めて深い。

傳統を重んずる和歌は、平安時代を通じ、古今和歌集の歌風を一氣に推進めて、その耽美的方面を愈、複雑な、細緻なものとして行つた。そして王朝の末期に至つてその極に達した。しかもこの頃政權

は漸く武家に移らうとして、皇室も廷臣も失意の状態にあつた。この失意を紛らさうとする心は、またおのづから自然に向つた。即ち自然に没入して、その美しさや寂しさを味はふ事によつて、満されない心を慰めようとしたのである。傳統の耽美的な心と、新たに知つた自然の身にしむ様な趣を愛する心とが、渾然たる一體となつた。

守覺法親王五十首歌よませ侍りけるに

藤原定家

春の夜の夢の浮橋とだえして

みねにわかる、横雲の空

春の夜は短く、見かけた夢が途中で覺めた。見ると、夜峯に沈んだ横雲が、今峯を離れて夜明とならうとする所であるといふ。事實は單純であるが、心が細かく働いて、複雑なものとなつてゐる。ま

た人間と自然とを一つにしてゐる。何れもこの當時の歌風の一つである。

題知らず

藤原家隆

眺めつゝ思ふもさびしひさかたの

つきのみやこのあけがたの空

寂しい秋の月を眺め、明方になつて月宮殿の明方を想像して、一層の寂しさを感じた心である。月宮殿は、支那の傳説にある月中にある御殿の名である。自身の寂しさから、遙かな月宮殿の寂しさを思ひやつて、寂しさの深くなるのを喜ぶ。これもこの當時の歌風の一つである。

かゝる風潮の中に生れ出たのが新古今和歌集であつた。即ち鎌倉時代の初期、土御門天皇の元久年間、後鳥羽上皇の院宣によつて、當時の代表歌人である源道具藤原有家、同家隆、同定家、同雅經等が

(一) 第八十三代。
(二) 元久二年。(一八六五年)
(三) 土御門順徳、後堀河の三朝に仕へた。納言貞元(一八五七年)歿、八十七年。
(四) 土御門天皇の朝に仕へて大藏卿に至つた。生歿年不詳。
(五) 蹴鞠の名手。和歌を定家(一〇二〇年)承久(一二〇二年)歿、八十八年。

撰集し奉つたもので、その歌數は約二千首、それを二十卷に類別してある。しかしながら、和歌の發達はこの頃を以て極頂とし、政權が全く武門に歸すると共に、その氣力の減退するにつれて、歌風も著しく衰へてしまつた。

さはれ王朝の文化に燦然たる光彩を添へた古今和歌集に端を發して、二十一代相次ぐ敕撰和歌集の出現は、千古の偉觀であつた。そして中世國民文學の誇は、敕撰の名によつて一層高められたのであつた。

吉田兼好^(一)

二〇 仁和寺の法師

一 石清水

仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、心憂くおぼえて、或時思ひ立ちて、唯一人かちより詣でけり。極樂寺高良な

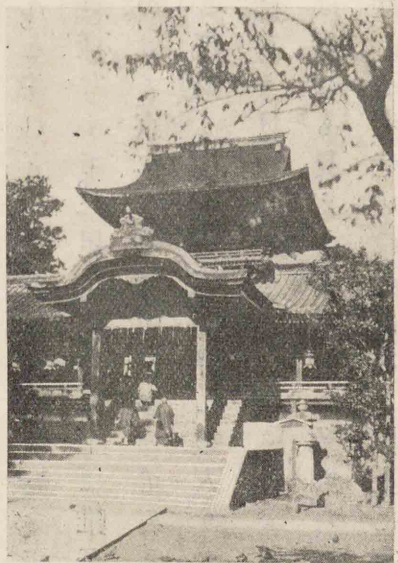
(一)鎌倉時代の文學者、歌人、京都の人。正平五年(一一八〇年)寂。年六十八。
(二)京都市右京區花園にある。宇多法皇の創建。俗に御室と言ふ。
(三)かちより詣づの籠にある末寺。
(四)共に石清水

かばかり

本意

かづく

どを拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。さて、かたへの人に逢ひて、年比思ひつる事はたし侍りぬ。聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ。そも参りたる人毎に山へ登りしは、何事かありけん、ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。とぞ言ひける。少しの事にも先達はあらまほしき事なり。



石清水八幡宮

二 かなへ

法師にならんとする名殘として、おのゝ遊ぶ事ありけるに、酔ひて興に入る餘り、かたへなる足鼎を取りて頭にかづきたれば、つまる様にするを、鼻をおしひらめて、顔を差入れて舞出でたるに、滿座興

唯腫れに腫る

がりがり
るて行く

くもり聲

に入る事限りなし。しばし奏でて後ぬかんとするに、大方ぬかれず、酒宴ことさめて、いかゞはせんと惑ひけり。とかくすれば、首のまはり缺けて血垂り、唯腫れに腫れみちて息もつまりければ、うち割らんとすれど、たやすく割れず、響きて堪難かりければ、かなはで、すべき様なくて、三足なる角の上に帷子をうち掛けて、手を引き、杖をつかせて、京なる醫師のがりゐて行きけるに、途すがら人の怪しみ見る事限りなし。醫師の許に差入りて、向ひゐたりけん有様、さこそ異様なりけめ。ものを言ふにも、くもり聲に響きて聞えず。かゝる事は書にも見えず。傳へたる教もなしと言へば、また仁和寺に歸りて、親しき者、老いたる母など枕上に寄りゐて泣悲しめども、聞くらんとも覺えず。かゝる程に或者の言ふ様は、たとひ耳鼻こそ切れうすとも、命ばかりはなどか生きざらん。力をたてて引き給へ。とて、稟のしべをまはりに差入れて、かねを隔てて、首もちぎるゝばかり引き

からき命まう

たるに、耳、鼻かけうげながらぬけにけり。からき命まうけて、久しく病みゐたりけり。

二一 自然美の心象

吉江 喬松

(一) 佛文學者、早稲田大學教授。明治十三年松本市に生れた。佛蘭西印象記、南歐の空、自然讀本、吉江喬松詩集等、著がある。

我々人間に取つての共通環境たる自然と、我々の日常生活とは、普通人々が思つてゐる以上に密接な關係があるのである。昔の人は朝鳥の鳴く音に一日の生活の吉凶を卜したといふ事であるが、我々が朝早く鳴く鳥の聲を靜かな心持で聽き得る様な時は、その事自身が既に我々に取つて幸福を意味する。なぜならば、その時我々は自分の生活を確かに支配してゐる事を示してゐるからである。我々の生活が取亂れてゐる時には、朝鳴く鳥の聲すら耳にはいらないのである。更に天文を見て人事の變異を察するといふ事も昔はよく言は

れた事である。これも天變地異に際しては、人の心が亂れがちである。常日頃の道德規律では支配されない心理状態に人心が動搖する事を豫見するのである。

我々は砂塵が風に吹きまくられる中に巻きこまれる時には、不愉快でたまらない。何となく氣がいら／＼して來る。心が落著かず、痼癢が起つて來る。これも事實である。けれど、その砂塵の舞立つ中にも、一種の力が現れてゐる。一種の美が現れてゐると感ずる人があるとすれば、その人は既にその人の心を攪亂す自然現象を、自分の心を以て取押へ、支配してゐるのである。

自然美を味はふといふ事は、つまりこの人間に迫り、人間の心を攪亂す自然現象を、自分の物として支配し、左右し、自由にする事である。若しさうする事が出來ない場合には、人々は常にこの自然現象に壓倒されてゐるのである。

朝鳥の鳴く音が楽しく聽かれ、ば、一日の生活が幸福であると卜するのは、即ち鳥の鳴く音のうちに美を見出した事であり、その鳥の鳴く音といふ現象を、自分の心の力で支配し左右した事であり、自分の心の力がいかにも平かに、穩に働いてゐる事を示してゐるのである。但し、我が心の働といふのも、要するに、一種の自然現象である。それ故、外界の自然現象を心の働を以て支配するとは、つまり、我々の心の内外の現象が一致し、調和し、平靜に、和やかになつた姿を指すのであつて、自然美とは、かゝる境に浮び上る心象を呼ぶのである。

この自然美を靜かに確かに味はふ事は、つまり、平靜な、確かな生活をする事である。いかに美しい空の下に立たうとも、いかに壯麗な山嶺の前に身を置かうとも、若しはつきりした心を持たなければ、その美は心のうちに浮び上らない。空は灰色であると同じく、山

はうるさい鐵の壁となる。けれど、自然美は決して贅澤な心には映じない。奢侈放逸な者の眼に映ずる物は、自然の美ではなく、寧ろ自然への所有欲である。心力の支配ではなく、物質欲の支配である。平靜な心力ではなく、束縛された心の働である。

心の平靜統一は、内から外へ向ふと共に、また外から内へ流れる。一莖の草花でも、自然の大きな物の片影であり、暗示である。大空を仰ぎ見る事も出来得ない人家の密接してゐる窓際に見かける一莖の草花は、大きな緑の平原の力を人々の心の上に發揮するのである。

自然美の浮ぶのは、美しい景色や、有名な名所に於てではない。それ等を探して歩くにはあたらぬ。我々の身邊日常の生活に於て、日の光の中に、吹過ぐる風の中に、一片の空色の中に求め得られる

のである。自然の美は畢竟我々の尊い心象に外ならない。

—自然讀本—

自修文

植物愛護の精神

住宅、器具から薪炭の類に至るまで、我々の生活が樹木の恩恵を蒙つてゐる事のいかに大なるかは、今更言ふまでもない。また樹木が山谷原野にあつて風雨や氣候の調節をしたり、河川の源を養つたり、洪水や山崩を防いだり、近海に魚類を聚めたりして、人類の生存上に及してゐる功德は誠に偉大である。文明の進歩につれて、殖林事業が益々奨励される様になつて來たのは、種々な方面から、樹木の必要が益々切實に感ぜられる様になつた結果に外ならない。

ところが、樹木はその發育の極めて遅々たるもので、三年や五年や十年では、決して木らしい木を見る事は出来ぬ。随つてこ

遅々
ゆる／＼した
さま、のろい
さま。

(一) 關白兼家の第五子。太政大臣。關白となつた。皆后となり、外戚の威望は、前古比がなかつた。世に御堂關白と稱する。萬壽四年(一六八七年)歿。年六十二。
 (二) 土御門の南、鳥丸の西。鳥羽天皇の御造營。正しくは土御門内裏といふ。

れを植ゑ育てて行く人の辛抱は非常である。かの位人臣を極めて、この世をば我が世とぞ思ふ望月の
 とまで自らその權勢を誇つた藤原道長でさへ、土御門殿の焼け
 た時、邸宅も即座に造り出されよう。金銀財寶も直ちに求められ
 よう。唯急にどうする事も出来ぬのは庭木である。と、昨日まで庭
 園に茂つてゐた老樹古木を思うて歎じたといふ事である。樹木
 を育てる事の困難はそれ程大きい。昔から古木大樹が神聖な物
 の如く尊重されて來たのも、決して偶然ではない。
 その發育の極めて遅々たる樹木が、百年、千年の風霜を凌いで
 嚴然と立つてゐる。人々がこれに對する時、それが材木としてい
 かに役立つかといふ様な實利的念慮を超越して、ひたすらその
 風姿の雄大崇嚴な靈氣に打たれるのも、また自然の事である。我

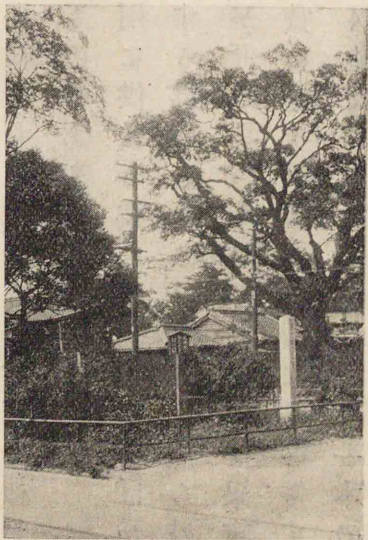
天然紀念物
 一つは古來存在してゐる原始林、固く動物、植物、地質、礦物等の長くその土地の記念となるもの。保存の指し定むべき。自然紀念物保存法に依る。

が國の上代人が、老樹、古木には靈があると信じ、これを祀つたのも、あながち幼稚な迷信としてのみ斥け去る事は出來ない。今日尙諸所に神木として尊まれてゐる古木があつたり、政府が天然紀念物として指定してその保存に力めてゐる老樹があつたりするものも、その意義甚大なるものがある。
 樹木はこれを伐採して實用に供する爲に必要であるばかりでなく、我々の生活を楽しくする爲に、それはなくてはならぬ物である。特別に美しい花を咲かせなくとも、特別に美味な果實を結ばなくとも、また特別に觀賞に適する様に作らなくとも、すべ
 ての樹木は我々の心を楽しくしてくれ、見渡す限り一本の樹木とてでもない沙漠に、誰が住まうと望む者があらう。いかなる金殿玉樓と雖も、若し一本の樹木もないならば、我々は到底住むに堪へないだらう。
 そのかみ唐制を模して造られた奈良の都の大路にも、柳を植

(一) 歌人。大納言旅人の子。聖武天皇に仕へた。延暦四年(一四四五年)歿。
 (二) 萬葉集卷十九、麗かな春の日に芽の出た柳を折取つててみるに柳を植ふる路の思はれる大

五畿七道
 維新前日本全國を代表する語。山城大和、河内和泉攝津の畿内の東國と、東海、山陽、南海、西海の七道となす。

ゑて趣を添へる事を忘れなかつた。萬葉集にある大伴家伴の春の日にはれる柳を取りもちてみれば都の大路おもほゆといふ一首の歌によつても、當時の都大路の美觀の上に、街路樹として植ゑられた柳のつとめてゐた役目の頗る重大であつた事が、窺はれるではないか。

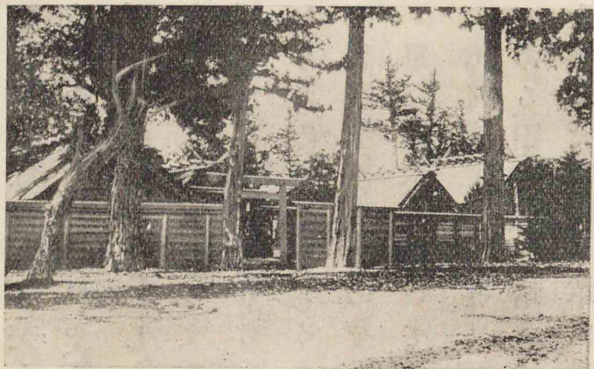


塚里一の原ヶ西下府京東

上代に於て人の集合する市場や、または五畿七道の驛路の兩側に、果樹を植ゑる事を命ぜられたのは、夏季にはその蔭に憩うて涼を納れ、飢ゑ疲れでは果實を採食ふ實用を旨とされた爲の様であり、これが我が國に於ける並樹の起原であると言ふが、後、並樹の種類は變つて

里程を標示するしるし

日光の杉並木は約一萬八千本あるが、その初部は寛永の初寄進松平正綱が寄進したものである。
 (一) 「十年之計ハ、如ク樹ヲ植ヘシ(管子)



苑神宮神勢伊

も、驛路の兩側に樹木を植ゑつらね、都市の街路に趣を添へるに綠滴る樹木を以てする風俗が益盛んになつて來た事は、誠に歡ばしい。諸國の街道に、一里毎に路の左右に標として塚を築き、上に樹木を植ゑたいはゆる一里塚なども、單に里程を標示する事以上に、旅する人々の心を慰める爲にいか程大切な事であつたか分らない。また老樹古木がいかにその境を崇嚴ならしめるに與つて力ある物であるかは、伊勢神宮に詣でたり、日光の杉並木を見たりした人々の、誰もが痛感した所であらう。
 「十年の計は木を植うるにあり。」と言はれる如く、樹木を植ゑ育

蔬菜
もの。あを

てて行く事は、決して實用の爲ばかりでない。樹木を愛護する事は、人間の最も大切な義務の一つであり、樹木を愛する精神は、人間の最も尊むべき美しい心の現れの一面である。神社や寺院の境内や、公園の入口や、街路樹の側などに、樹木の枝を折るべからず。とか、樹木を大切にしませう。などといふ様な文句を記した札を立てなければならぬのは、まさしく人心の頹廢を示すものである。單に樹木に就いてのみでなく、草に就いても同様である。田や畑に培養する穀類、蔬菜や、特に觀賞に供する爲に植ゑられた花咲く草は言ふまでもなく、野に茂り、山に生えてゐる雑草と雖も、いはれなくしてこれを害する事は、能ふ限り慎まね



日光の杉並木

(一) 當時學習院長であつた。
(二) 靜岡縣(駿河國) 沼津市。
(三) 神奈川縣(相模國) 鎌倉郡川口村。

(四) むさくるしくたゞ茂りあつてゐる夏の雑草の中にも、こゝろなにも美し咲く撫子の花があるよとの意。
贊す
畫圖の上に題する詞を書く
鴻毛
おほとりの毛極めて軽い物事にたとへる。

ばならぬ。植物を愛する精神は、その人の性情をも美しくする。この精神を失ふ時、その人の心はおのづから荒ぶ。かの軍神乃木大將は、沼津海岸の松原に學習院の游泳寄宿舎の新築された時、成るべく樹を伐らない方針を第一とされたといふ。それからまた片瀨に游泳場のあつた時は、屋舎の狭い爲に海濱に天幕を張つて、大將も學生と同じ様にそのうちの一つに起臥されたのであるが、そのあたりの草原に撫子が澤山咲いてゐるのを、幼年の生徒がむしり取つておもちやにするのを、大將は心ない事と思はれ、一生徒の扇面にその花を寫生して、
いぶせくもたゞ茂りあふ夏草の
なかに咲くやなでしこの花
の一首を贊し、以てその草花の愛すべき旨を諭されたといふ事である。身命を鴻毛よりも軽んじて君國の爲に盡された將軍の心の底には、かくの如き優しく美しい情があつたのである。

自分の住んでゐる草庵の床の下に頭をのぞかせた竹の子を
いとしく思ふ一念から、床板に穴をあけ、壘をのけて、それを伸び
るだけ伸してやらうとしたといふ越後の良寛和尚の逸話は、決
して笑ふべき奇談としてのみ聞捨てる事は出来ない。一草一木
に對してまでもその様な美しい愛があつたればこそ、良寛和尚
のあの様な尊い人格が完成されたのである。

植物愛護の精神は、動物愛護の精神と同じく、人生の實利的見
地からばかりでなく、人間生活その物の向上淳化じゆんかの上から、益高
調されなければならぬ。偶(一)今年四月三日の神武天皇祭當日、東京
日比谷公園に、都市美協會主催で名もゆかしい「植物祭」が行はれ、
植樹灌水の式や、各区の小學校、少年團、中等學校、市託兒所などに
對する苗木の授與式が行はれた。誠に歡ばしい事である。植物愛
護の實際運動は、かうして益盛んに全國土に起らなくてはなら
ぬ。動もすれば怖るべき頽廢に赴かうとしつゝある現時の人心

淳化
淨化になるこ
と。すなほに
なること。
(一)昭和六年

植樹灌水の式
樹をうる水を
注ぐ式。

都鄙
みやことゐな
か。全國

(一)歴史家、評論
家。曾て梅溪
と號した。明
治二十三年大
阪市に生れた。
史話、古代中
世日本文學十
二講等の著が
ある。

を救ふ爲にも、この植物愛護の精神の高調とその實際運動の奨
勵とは、現下の急務の一つであると信じ、その精神の一日も速に
普く都鄙みやことに徹底せん事を祈る。

二二 労働の一日

高須芳次郎(一)

労働は尊重すべきものだ。労働の一日は、たとひそれが機械的に
流れるにしても、無意味なものではない。各自額に汗して衣食する
事は、人間の最大愉快事である。そしてその一日は祝福された一日
だ。爲る事もなく、動く事もなく、責任もなく、唯その日を夢の様
に暮らす者は、外面から見ると極めて安樂の様だが、決してさうではない。
この種の人々は自己の無爲に苦しめられ、無用の妄想にその一日
を重荷の様にしてしまふ。そしてかうした人々の心身は、次第に緩
んで、抵抗力や反應力を失つて、魂のない人形と化してしまふ事が

多い。

これに比較すると、労働する者の心身は、精力を濫費しない限り常に緊張し、錬磨される。その一日は精神的にも、肉體的にも、或程度まで充實する。かうして刻々に過ぎて行く時を送迎するのは愉快である。

能く労働する者の身體は常に健かだ。多忙な爲に病む様な事は少い。そして労働の後には得る休息は、光輝に満ちた平和の樂園に等しい。

人生を皮相的に見る者は、車を牽いて坂を登り行く者や、路傍に働く工夫を見てとかく侮蔑する。けれどもそれは誤つてゐる。彼等は勿論精神上の愉樂を知らぬかも知れぬが、無爲の寂しさと悲しさを知らない。適當の労働をした後、一碗の粗食に舌鼓うちつゝ、その日の疲勞を忘れる快さは、獨り彼等の領する所である。

巴巴
ス
ニ
シ

私は労働を讚美する。しかし、労働その物に没頭して自己の精神的進化を忘れたくはない。たとひ機械的な生活を送るにもせよ、或程度の内省を忘れたくはない。全然物質化したくはない。人間はともすれば自己に就いての思索を忘れて、無意義に近い、内容を乏しい一日を送る事が往々ある。かくすればとて、誰もそれを咎めようとはしないけれども、靜かに考へると、何となくその精神的に貧しい一日が、恐らく我が心の髓を腐らしてしまひはせぬかと戦慄する事がある。

しかも、この鋭い内省が何人にも長く續く事は少い。ともすれば眼前の事に制せられ、心身の疲勞に壓倒されて、自ら姑息な平安に馴れようとする場合が多いのを悲しまずにはゐられない。眞に人生の大道を歩まうとする者は、正直な労働と共に有意義な思索を續けて、淺薄な小さい自我を深め、強め、道義的にも、哲理的にも深刻

ならしめねばならない。これがその日くの充實した心の糧となるのである。
—蒼空—

二三 那須の與一の事

さる程に阿波讃岐に、平家に背いて源氏を待ちけるつはものども、あそこの嶺、此所の洞より、十四五騎、二十騎うち連れく馳せ來る程に、判官程なく三百餘騎になり給ひぬ。今日は日暮れぬ、勝負を決すべからずとて、源平互に引退く所に、沖より尋常に飾つたる小舟一艘、汀へ向つて漕寄せ、渚より七八段許にもなりしかば、舟を横さまになす。あれはいかにと見る所に、舟の中より年の齡十八九許なる女房の、柳の五つぎぬに紅の袴著たるが、皆紅の扇の日出したるを、舟のせがいに挟み立て、陸へ向つてぞ招きける。
判官、後藤兵衛實基を召して、あれはいかに。」と宣へば、射よとにこ

(一)源義經。
尋常に飾る

柳の五つぎぬ
舟のせがい

矢面

てだれ

小兵
さん候



島屋

與一呼べ。」とて召されけり。

そ候らめ。但し大將軍の矢面に進んで、けいせいを御覽ぜられん所を、てだれに狙うて射落せとの謀とこそ存じ候へ。さりながら扇をば射させらるべうもや候らん。」と申しければ、判官、身方に射つべき仁は誰かある。」と問ひ給へば、「てだれども多う候なかに、下野の國の住人那須の太郎資高が子に、與一宗高こそ、小兵では候へども、手はきいて候。」と申す。判官、證據があるか。」さん候。かけ鳥などをあらそうて、三つに二つは必ず射落し候。」と申しければ、判官、さらば

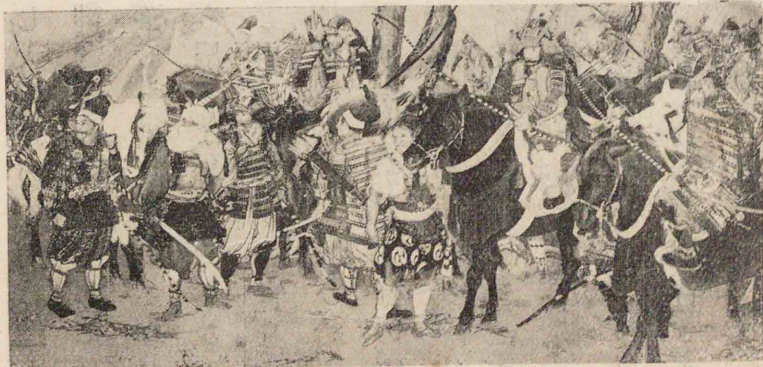
世帯とて思ふ金飾の銀でなす大刀
一咫

出来ようとも考へん
れません。その射
そしなふものをなすは
水の味ちや御弓矢
の不久(ゆづ)も
たしかに出来ようとは思
云ひつけ、それをいさ
ます

きりふの矢

一定

與一その頃は、未だ二十許の男なり。褐
に赤地の錦をもつて、おほくび、はたそで
いろへたる直垂にもよぎをどしの鎧著
て、あしじろの太刀をはき、二十四さいた
るきりふの矢負ひ、うすきりふに鷹の羽
わり合せてはいだりけるぬための鏑を
ぞ差添へたる。重籐の弓脇に挟み、冑をば
脱いで高紐に掛け、判官の御前に畏まる。
判官、いかに與一、あの扇の眞中射て、かた
きに見物せさせよかし。と宣へば、與一、つ
かまつるとも存じ候はず。これを射損ず
るものならば、永き身方の御弓矢のきず
にて候べし。一定仕らうざる仁に、仰せつ



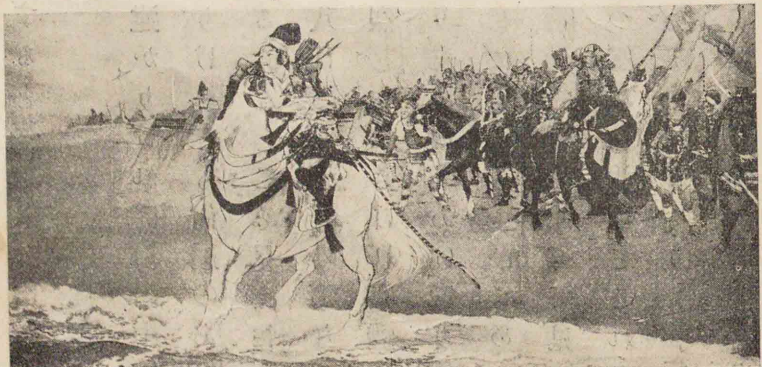
扇の的(筆三月形尾)的

要諦を物くらし

御説

大いさ

けらるべうもや候らん。と申しければ、判
官大きに怒つて、今度鎌倉を立つて西國
へ向はんずる者どもは、皆義経が下知を
背くべからず。それに少しも子細を存せ
ん人々は、これより疾うく、鎌倉へ歸ら
るべし。とぞ宣ひける。與一重ねて辭せば
悪しかりなるとや思ひけん。さ候はばは
づれんをば存じ候はず。御説で候へば、仕
つてこそ見候はめ。とて御前を罷り立ち、
黒き馬の太う逞しきに、まるほやすつた
る金覆輪の鞍置いて乗つたりけるが、弓
取直し、手綱かいくつて、汀へ向いてぞ歩
ませける。身方のつはものども、與一が後



扇の的(筆三月形尾)的

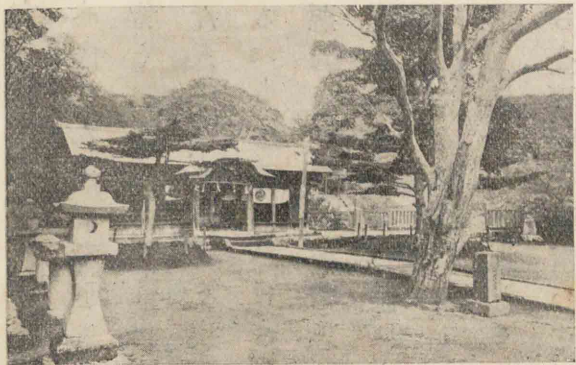
矢ごろ

(一)壽永四年、(二)八四五年

すくしに定まらず

①くつばみ
あつまつて

神明



(社神泉温)神明大泉湯須那

與一目をふさいで、南無八幡大菩薩別しては我が國の神明、日光の

を遙かに見送つて、この若者一定仕らうずると覚え候。と申しければ、判官もたのもしげにぞ見給ひける。

矢ごろ少し遠かりければ、海の中一段許うち入つたりけれども、尙扇のあはひは七段許もあるらんとこそ見えたりければ、頃は二月十八日酉の刻許の事なるに、をりふし北風烈しう吹きければ、磯うつ浪も高かりけり。舟はゆりあげ、ゆりする漂へば、扇もくしに定まらずひらめいたり。沖には平家船を一面に並べて見物す。陸には源氏くつばみを並べてこれを見る。何れもく、はれならずといふ事なし。

よつびいてひやうと放つ十二束三ぶせ

(籠)

権現、宇都の宮、那須のゆぜん大明神、願はくはあの扇の眞中射させてたばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓切折り自害して、人に再び面を向ふべからず。今一度本國へ歸さんと思し召さば、この矢はづさせ給ふな。と、心のうちに祈念して目を見開いたれば、風も少し吹きよわつて、扇も射よげにこそなつたりけれ。與一鏑を取つて番ひ、よつびいてひやうと放つ。小兵といふ條十二束三ぶせ、弓は強し、鏑は浦響く程に長なりして、あやまたず扇の要際一寸許おいて、ひいふつとぞ射きつたる。鏑は海に入りければ、扇は空へぞあがりける。春風に一もみ二もみもまれて、海にさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の日出いたるが、夕日に輝くに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬゆられけるを、沖には平家ふなばたをたゝいて感じたり。陸には源氏えびらをたゝいてどよめきたり。

—平家物語—

雨しづくと泣

郎高綱が宇治川の先陣を語りけるに、天徳寺あはれがりて、雨しづくと泣きけり。さて、今一曲前の如くあはれなる事を聴きたし。と言へば、那須與一宗高が扇の的を語りけるに、平家半ばより、天徳寺また落涙數行に及べり。後日に家臣の輩に、過ぎし日の平家はいかゞ聴きつる。と言ふに、家臣ども、最も面白き事にて候。但し我等ども一つ心得ぬ事こそ候へ。前後二曲共に勇烈なる事にて、あはれなる方は少しも候はぬに、君には御感涙に咽ばれて候。これはいかゞの事にて候にや、今に不審なる事に何れも申し合ひ候。と言へば、天徳寺驚きて、只今までは各をたのもしく思ひ候ひしが、今の一言にて、さて力を落して候。先づ佐々木が先陣をよく合點して見られ候へ。頼朝、舍弟の蒲冠者にも賜はらず、寵臣の梶原にも賜はらぬ池月を高綱に賜はるに、あらずや。さればそのかひもなく、この馬にて宇治川を先陣せずして、人に先を越されなば、必ず討死して再び歸る

武邊

迷惑す

まじと、頼朝に暇乞して出でける。その志を察して見られよ。あはれならぬ事かはして、しばし涙を拭ひつゝ、暫しありて言ひけるは、
 「また那須與一も大勢の中より選ばれて、唯一騎陣頭に出でしより、馬を海中に乘入れて的に向ふに至るまで、源平兩家鳴りを静めてこれを見物するに、若し射損じなば、身方の名をれたるべし。馬上にて腹かき切つて海に入らんと覺悟したる心を察して見られ候へ。武士の道程あはれなるものは候はず。某は毎に戰場に臨みては、高綱、宗高が心にて槍を取り候故、右の平家を聴く時も、兩人の心を思ひやりて、落涙に堪へざりき。然るに、各にはあはれになかりしと申さるゝにつけて思ふに、各の武邊は唯一旦の勇氣にまかせて、眞實より出づるにてはなきにやと思はれ候。それにてはたのものしからずこそ候へ。」と言ひしかば、諸臣皆迷惑して、辭なかりしとなり。
 これ天徳寺が武邊は涙より出づれば、固より仁者にはあらねど、

武の一筋は仁に根ざして、惻隱の心より發するにあらずや。然るに武は殺獲の事にて、手荒き道なれば、言はば仁とは黑白のたがひある様なれども、仁より出でざるは、眞の武にあらず。況やその餘の事は、尙もて知るべし。されば忠孝も禮儀も、文道も武道も、内より油然として潤ひわたりて發するにあらざれば、眞のものにあらず。これ即ち前に言ひし人に情あり、ものあはれを知るの心なり。すべて諸の言行共に、義理に當りては悉く忍びざるの心より出でて、天徳寺が涙こぼす様にだにあらば、これ心徳の全きなり。仁者と言はん、に何の疑かあるべき。

—駿臺雜話—

(一)江戸時代の儒者、經濟家、名人は、寛政元年(一七九九)梅園三語、價歿、年六十七。梅園叢書、原梅園叢書等の著がある。

二五 毀譽

毀譽は人の大節なり。然りと雖も世舉りて譽むるにも必ず察すべし。人舉りて毀るにも必ず察すべし。況や一人は譽め、一人は毀る

三 浦梅園

訟事

事に於てをや。例へば、訟事あらんに、兩方理ありと思へばこそ互にいひ募りてやまざるなれ。これを奉行のさばかんに、とにかく一人は勝ち、一人は負けべし。勝ちたる人は奉行を譽め、負けたる人は毀るなり。また悪しき人なりとも、それに伴ふ人はこれを善しと思へばこそ交るなれ。我が善しと思ふをば譽め、我が悪しと思ふをば毀る習なれば、その毀譽によりてその人の善悪も分ち難し。同じ一杯の酒ながら、



三 浦梅園

上戸は酔ひて面白き物なりと言ひ、下戸は酔ひて苦しき物なりと言ふ。よし人傳などに聞く人の善悪のさは、おぼつかなき事なり。昔、人ありて、その子を或寺へ遣し置きけるに、暫くありて逃歸り、

(廁)

理不盡

住持の事を毀りけるは、我に月代剃れと言ひければ、例の如く剃りけるを、剃り様のわきて悪しとていたく叱りぬ。また或時、我がかはやに行きけるを見て、何とてかはやへは行きし。不届なり。向後かはやへ行くべからずと言ひ、その後、朝飯たくとて味噌をすりけるに、これも味噌をするが悪しきとて叱りぬ。すべて理不盡の次第、殆ど困却に及びたり。と語りけるを親聞きて、さりとは出家にも似合はざる事なり。とて、急ぎ山に登り、右の事どもを詰りけるに、住持聞きて、いや、さ様の事にてはなし。常々髪よく剃る故に、この頃剃らせけるに、いたく眠りて、これを見給へ、斯様に頭へ切りこみ候。とて傷を見せ、その上、かはやも行くべきかはやへは行かで、客の爲に設けたる方へ行き、味噌も常の味噌をさしおき、客に使ふべきを使ひし故、これ等の事を返すくも戒め論しつれ。と言ひけるにぞ、親も理に服して、却つて罪を謝しけるとぞ。

(一)長野縣伊那郡
小野川の谷で、
古驛路にあつた。

宸襟

信濃の國（一）菌原といふ所に木あり。遠くより見れば、箒の形の如し。よりてこれを箒木といふ。されど近づきて見れば、箒に似たる所もなく、うち繁れりとかや。遠きより見聞くと親しく見聞くと、多くはこの箒木の類なるべし。凡そ人のものを批判するも、我が好む所を譽むるものなり。俳士に歌人の評判せさせ、日蓮宗に眞宗の評判せさせんに、いかでか公論あらん。同じ路を二人して行かん、一人は健かにしてこの路近しと言ひ、一人は疲れて遠しと言はん。これ路に違あるにあらず、心に違あればなり。例へば、義經の事を論じて、義經を善しと思ふ人の言はんには、この人誠に幼より常人にてはおはしまさざりけり。俱に天を戴かざる讐を報せんと、夜々寺を出でて太刀打を學び、遙かに秀衡が人となりを見て、これに依り、遂に飛ぶ鳥も落ちんばかりなる勢の平家を二三年のうちに攻滅して、亡父の恥辱を雪ぎ、法皇の宸襟を安め奉り、絶えたる源氏を興し、兄

敷

時信の子。一
且西海に走り、
平家滅亡後、再
び上洛した。か
びまた佐渡に、
後まされた。一
治五年(一一八
四)年(一)の文
で歿した。佐渡
六十一年

頼朝を天下の武將と仰がしめたり。と言ひ、また義經に不滿なる人
は、なる程、この人戦争に一通り自由を得たる人ながら、恣に平時忠
の女を納れ、梶原景時とせんなき口論をしたる、大將たらん人のし
わざに似ず。然るを都に逃げのぼり、頼朝追討の院旨を申し受け、吉
野山にて一人の靜に別れかね、兒女子の涙をしぼられし。などと
ふ。かく善しと思ふ人の論と、悪しと思ふ人の論とには、誠に雪と墨
との差あるなり。その悪しき所を捨てて善き所を取る、これ人を用
ふる道なり。その悪しきをば悪しとし、善きをば善しとす、これ公の
論なり。また分相應につきて言ふ事あり。鼠を甚だ大なりと言ふと
も、牛の小さきには及ばじ。蛇を甚だ短しと言ふとも、みづよりは
長かるべし。故に人を善しと言ひて譽むるも、悪しと言ひて毀るも、
その場合を考ふべき事なり。

—梅園叢書—

二六 文化の使節

驚くべき文明の進歩は、地球の境域を狭めたかの觀がある。そし
て極東の孤島である我が國が世界強大國の班に列なつて以來、我
等の眼に映ずるヨーロッパやアメリカは、昔の人たちの驚歎した程
のものでもなくなつてゐる。けれども、今尙海の彼方へ行くといふ
事は、人々に何か新しい衝動を與へる。海を渡るといふ事が、それま
でに人の心を騒がすのである。かうして絶海の孤島に終始した我
等の父祖は、時に果敢な氣象を發揮し、四周の海を利用して、大陸の
文明を吸収した。そして開化の波に浴しては、文化の歩みを促進し
て來た。

遠い昔、上代人の海外發展の壯舉は、先づ三韓との交通によつて
始められた。そして漢族の文明は、朝鮮半島を経て我が國に傳來し
た。茲に大陸風文明の搖籃時代は展開されたのである。

衝動

果敢な氣象

搖籃時代

聖德太子は小野妹子を隋に遣された。それは我が國に於ける海外派遣の第一使節であつた。既にこれまで幾たびか行はれて來た間接の輸入に嫌らないで、新たに大陸の文化に直面しようとなされた太子の御意圖は、誠に雄大なものであつた。殊に、日出處天子致書日沒處天子無恙敢へて對等の禮を執られたその國書は、苟くも自國を萬邦に秀でた中華の國と自負する隋の煬帝をして、いかに驚愕せしめた事であらう。それだけにまた太子の宏大な御氣宇がしのばれるではないか。

遣唐使の派遣は、歴史の上に於ける長き日唐關係を語るものである。しかし、その航海の危険は數多の人命を奪つた。榮譽ある國際的使節に任命されながら、生別死別の悲歎を長袖の蔭に祕めて、彼等は海を渡つて行つた。しかしながら、大化の新政、大寶律令、奈良の都や平安朝の文化など、皆國史に輝かしい一期を劃する我が國文

淵叢
將來する

化の淵叢は、一にかゝつて彼等の將來した唐朝文明の上にあつた。固より根柢の深い固有文化の誇は棄てなかつたにしても、文化開拓の鍵は彼等が握り、彼等の營々たる辛苦と努力とが、新文化を樹立したのであつた。蓋し島國日本の活路は、唯四周の海を利する以外に途がなかつた。より高き文明との接觸は、自ら出でて自らその氣運を開く以外に途がなかつたのである。

平安朝の文化には、模倣文化の域を脱して、正に日本文化の獨立を肯定させるものがあつた。國民は漸く自主的觀念を抱いて、自國文化の向上に専念しようとした。その斷えざる文化の向上は、既に當時に於て唐朝文化の恩澤を必要としなかつた。

日本國者、誠雖爲如來之金言、唯以假字可奉書也云々。

その語は沙門の口より出で、しかも佛教を傳へるのに假名を以てせよといふ思想、自主的觀念の熾烈なこの一語に、當年の日本文化

(一)河海抄に引用
されてゐる江
談に源信僧都
の語と傳へる。

1110年
Portugal
(葡萄牙)

動因

(一) 宗麟と號した
(二) 近國を攻略して豊後豊前筑後肥後四箇國を領した。天正十五年(一五八七)年歿、年五十八。
(三) 肥前國(長崎縣)國原、日野江兩城の主。慶長十七年(一六四二)年歿、年二十七。
(四) 肥前國(長崎縣)大村の城主。有馬晴信と祖を同じくする。

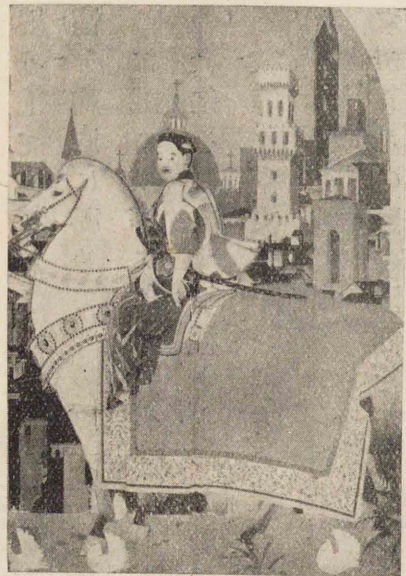
の精彩を窺知する事が出来る。やがて遣唐使は停止されて、日支の國交は永く絶えた。

しかしながら猪水は徒に濁る。刺戟のない文化に發展の途の少いのは寧ろ當然である。新しい自國文化の飛躍は、唯燦爛たる文化に陶醉した王朝人たちの貪る夢に過ぎなかつた。そして政權の移動は文化の向上を阻み、その退歩を餘儀なくさせたのである。

天文十二年(一五八三)ポルトガル人の渡來は、我が國文化更生の遠い動因となつた。切支丹宗の傳來に連れて、新しい泰西文明に遭逢した國民の歡喜は、やがて近世日本の文化を生成す氣運と化した。嘗て日支交通の衝となつた北九州に、再び新たな異國人の足跡が繁くなるに隨つて、耳目に馴れぬ異國の新文化に憧憬する念は俄に勃興した。

天正十年、九州の大名大友義鎮、有馬晴信、大村純忠の三人は、遙々

(一) 字は祐益、キリスト名をトシマンシヨトといふ。大友義鎮の姪なる日義向國都於郡の城主。伊藤祐吉の慶長十九年(一六四四)歿、年四十三。



(筆邨青田前) 節使マロー

特使をヨーロッパに遣し、ローマ法王とスペイン國王とに敬意を表せしめた。その使節は皆紅顔の少年ばかりであつた。正使伊藤義賢當年十五歳の少年使節は、かくして萬里の波濤を蹴つて、遠くローマに使したのである。

固よりこの特使派遣の動機には、宗教的の意圖が働いた事は言ふまでもない。宣教師の慫慂に端を發して、熱烈なキリスト教の信者である三大名が、唯一筋に彼等の信仰心を滿さうとして、單にその信仰の標的たるローマ法王に敬虔の微表を致さうとするものであつたに過ぎない。しかもその渡航たる、航海術の未だ進んでゐない當時にあつては、帆前船を用ひ、風

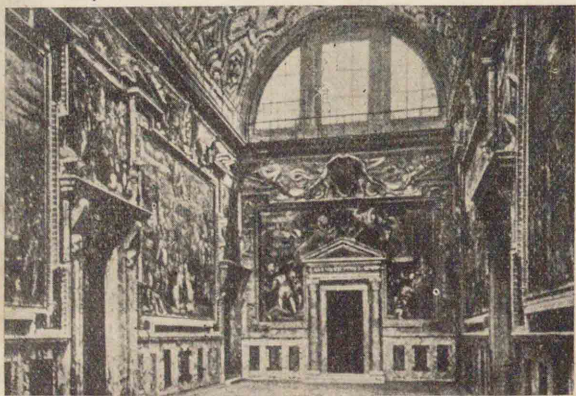
契機

(1) Macao. (澳門) 我が國人は天川と呼んで支那に於けるホルトガルの領地。
 (2) Tatin. もとローマを中心としたイタリ語の一方、西、葡、佛、伊、語の本となつた。

を待つてその力を利用して行くより外なかつた。重き君命を受け
 て決死の覺悟を抱くとは言へ、見ぬ世の國へのあこがれがどれ程
 深いものであるにせよ、故國に孤獨をかこつ母との惜別を彼等は
 どうして忘れ得よう。しかも果敢な海國少年の意氣は、その愁歎の
 情を胸底に秘めて、この重大な任務の前に毫も畏縮する所がなかつた。
 誠に彼等によつて代表された雄偉な氣魄が、やがて近世日本の文化を生成す契機となつたのである。
 彼等は南支那のマカオに先づ寄航して、此所に九箇月許滞在した。この間に彼等はラテン語の學習に就いた。遠い異郷への旅の途すがら、その國の國語をかくあわたゞしくも學び知らうとする辛勞。それは將に擔ふべき使命の、彼等にいかに重きに過ぎてゐるかを物語るものであつた。
 一行は印度洋を經、遙かにアフリカの南端喜望峯を通つてポル

悠揚として知らぬ
 (The Vatican) ローマ法王の宮殿。ローマのタバー河畔にある。

トガルに到り、陸路スペインに入つて國王に謁見した。更に此所から海に出てイタリーに行つた。そして法王の膝下たるローマに入府したのは、日本を出てから實に三年一箇月目であつた。行程正に二萬餘哩。その間の難航、險路は、その費された日子の多いのを以ても知る事が出来よう。
 十五歳の少年使節、今は既に十八歳の日本武士伊藤義賢は、他の二使と共に、白地に金糸を以て花鳥の縫をした國服に、眞珠寶石を鏤めた刀を左に佩き、右手に短刀を持ち、馬上に悠揚として迫らぬ國士的態度を以て、ローマの市民を驚歎隨喜せしめた。そして法王に謁見する式は、バチカン宮



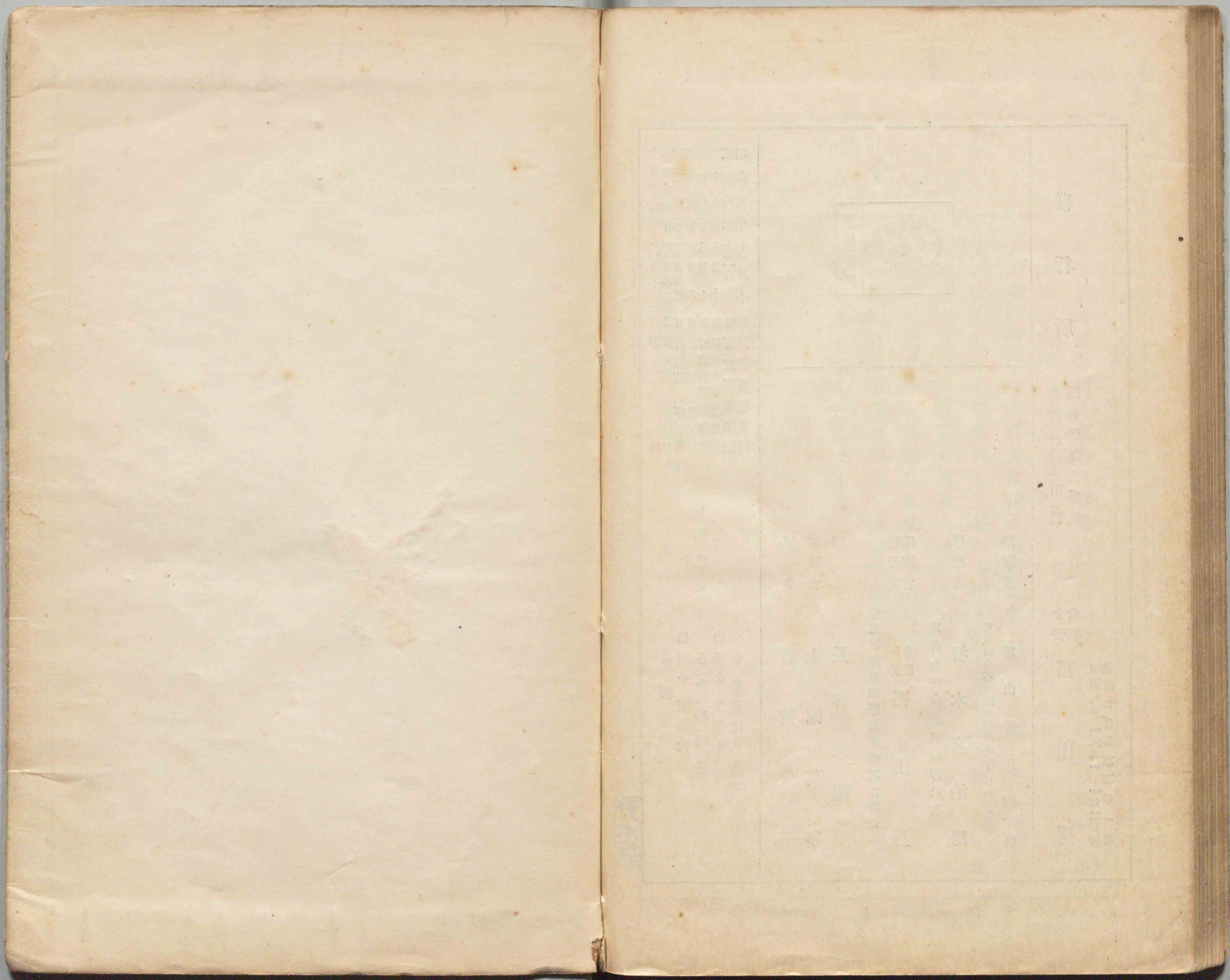
「間の王帝」内殿宮カンチバ

殿内の帝王の間に於て、感激のうちに嚴肅に行はれた。法王の前に跪いて恭しく接吻の禮を執るこの日本使節を、法王は身を屈して扶け起し、二度づゝ抱擁して、その額に接吻を與へた。そしてその満面には歡喜と愛情との熱涙が流れて、せきもあへぬ有様であつたといふ。法王のこの絶大な喜悅は、言ふまでもなく、東方布教の成功に限りなき満足を感じたものではあつたらうが、今始めて知る東方異域の年若き信者、その信仰の熾烈なる事と、その材幹の卓越してゐる事とに、また量り知れぬ心強いものを感じたのではなかつたか。

彼等は誠にその使命を辱しめなかつた。眞に日本の光榮を、その使命の上に輝かしたのである。けれども彼等の使命は、畢竟するにローマ法王廳の訪問に過ぎなかつた。しかも彼等が無事歸國した時には、既にキリスト教排撃の空氣が全國を覆うてゐた。歸來間も

なく、彼等は相携へて秀吉に謁し、西方の文明を具さに語つて、秀吉の好奇の心を躍らせたが、一度立てた國策を翻させる事は出来なかつた。そして彼等の君侯たる大友、大村の兩侯は既にこの世になく、彼等がヨーロッパに於て見聞經驗した新知識を、自由に我が實社會に應用する途がなかつたばかりでなく、彼等はこの前後八年に亙る長途の旅行中、餘りにも篤信な宗教家、一箇の求道者となつてしまつた。されば彼等は唯一介の宗教的使節として、克くその任務を果したのみであつた。しかしながら、よしその使命が直接我が國の文化に影響を及さなかつたにしても、かくして東西兩洋を結び附けた親交の連鎖が、泰西文明流入の機縁を深めた事は争はれない。

文化の使節。彼等は身命を賭して、遙かに海の彼方に日本人の足跡を残して來た。先の遣唐使然り、今また出でて遠くローマに使し



修道中學部

第三學年 第三班

中村益次郎